

函	第 972 号
架	第 10 号
號	第 88 号

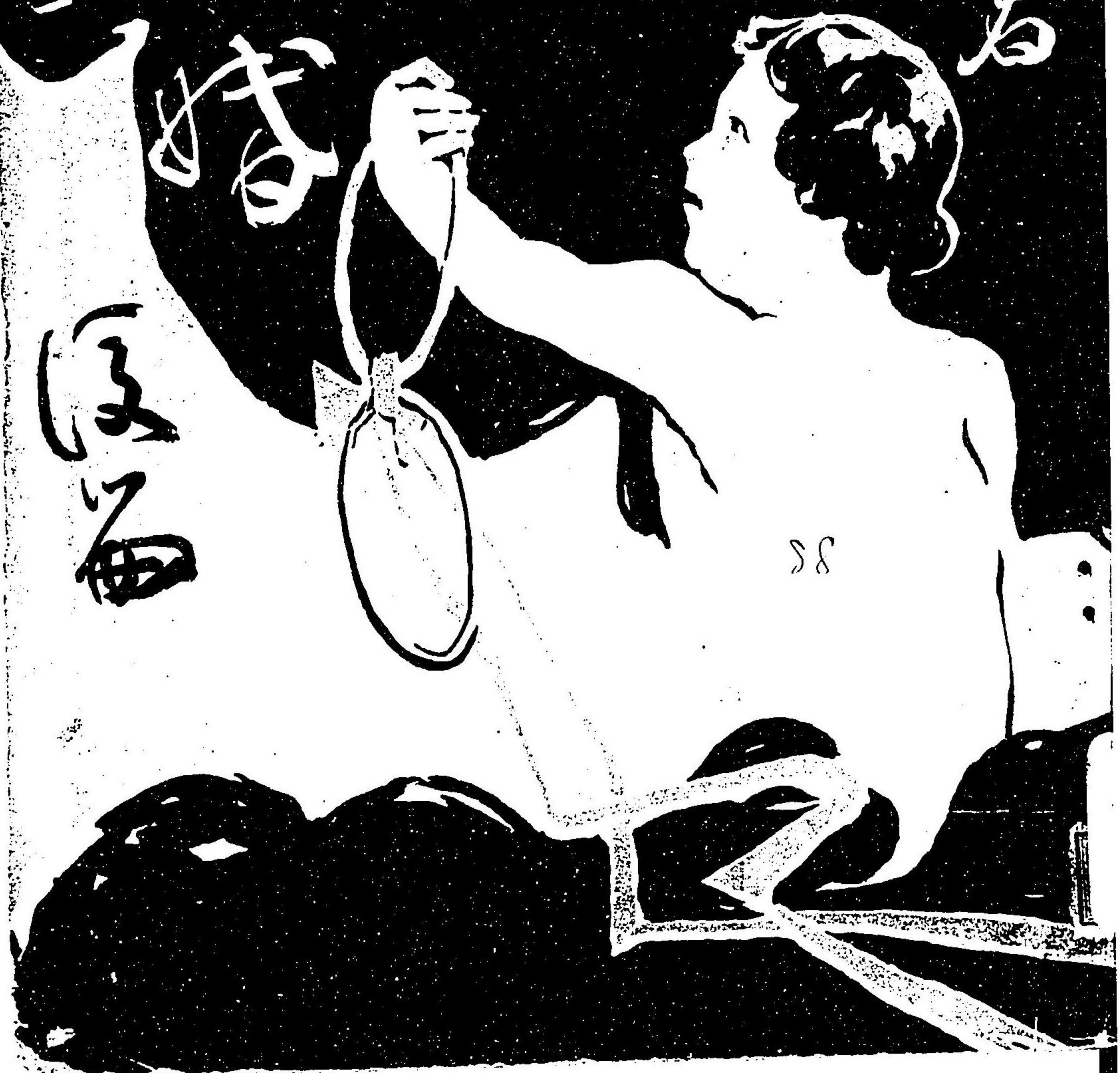
224
62
80

多扶教母
右甚名
川

自由結成

自由

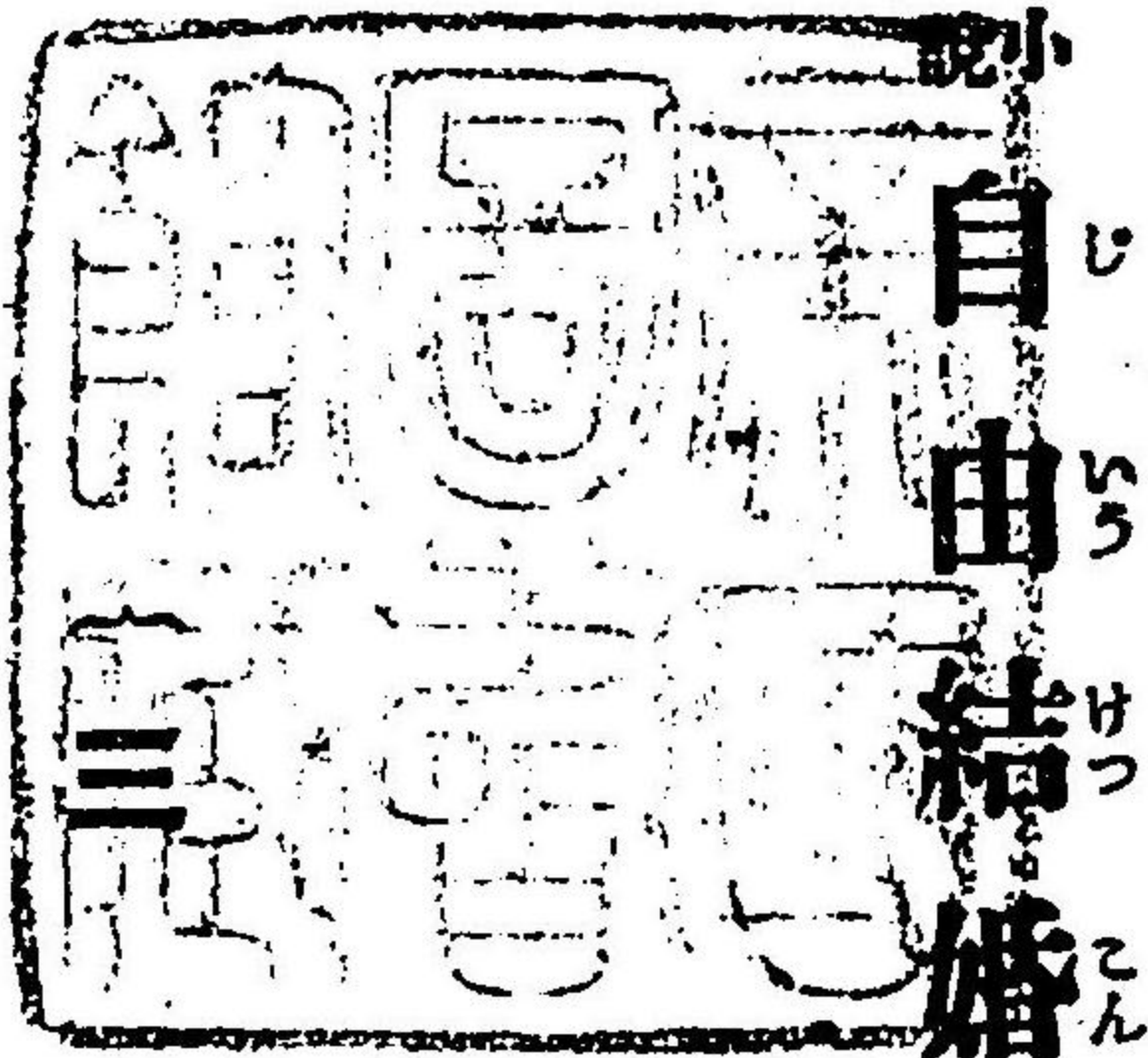
88





特
903

小説 自由結婚



小説 自由結婚 後編

十

徳田秋聲
三島霜川
合著



お今は其の思はしい私語を耳にして、思はず首を夜具の衿より伸ばして、氣遣しげに耳を聳て居た。母の去つた後は、健三の嘆息のみ少時襖を洩れて来たが、其の度お今は、針もて胸を刺されるやうに覺れた、静に耳を傾けて居ると、健三は尙だ眠らぬのか、猶一道の微暗き燈火は襖の隙間から洩れ

て、折々煙管を叩く音が、半夜の寂寞を破つて居た。
 口惜さは無くて謂しらぬ悲哀を胸に齎して、果は健三の決断の
 無いのが怨めしくもなる。翌朝は夙く起出で、健三の眼の
 覚めるのを待つて居たが、容易に起出る氣色も無いので、心
 細さの増すばかり。朝飯を了つて、お春お花の學校に行つて
 から、時計の刻々に刻み行く音にのみ耳を傾けて居ると、十
 時頃の事であつた、母のお定は車を備つて、
 「さ、お今さん、車が来ました、健三は正午頃で無くては起
 きますすまいから、お前さん先へ王子へお歸りなすつた方が
 可いでせう。ね、然うなさい。」
 「は、さ、と、應ふるのみ。
 お今は吩咐らるゝまゝに、憂に掻巻る胸を撫さすりつゝ、健
 三に會はで王子へ歸る事とはなつた。雖然、開は明かに我を

追拂つたのである！、と、お今は内心に承知した。
 憚る時唯一の頼の綱は頼四郎である。我が心のうちを露に謂
 得るは、健三より却つて萬事に同情ある頼四郎ではあるまい
 か。然れど頼四郎とは、到着した其日より、何かは知らず断
 り難き一條の情の糸の引かるゝやうで、而も奇しく紊あつて
 居る事なれば頼の目應の目の人々の眼には何んどか見ゆる事
 であらう。とは謂へ、開は唯一片の情誼に依つて結ばれた交
 にはあれど、口さがない國子の爲、健三の容態にさへ快から
 ぬ感の微めくも、我が心道の種なれば、出来るだけ其の人の
 側へ寄りぬやうに力めなければ叶はぬこと！。思へば世は憂
 さものよ。
 停車場へ出て王子の町盡頭も過ぎて、其處より野を横越つて
 煙突で見覺れた製造場を目標に一筋道を辿つて行くと、思は

すも確と頼四郎に出會つた。

「今お歸り。」

と例の人の胸に泌み込ひやうな笑を湛へながら、熱とお今の面を噴つて居た。

お今はさつと面を赧くして、

「只今。」

と會釋する。

其の姿、深張りの傘を肩に懸して、今朝は修飾も忘れたのか生地のままの面は、宛然大理石なんどのやうに滑に皮膚のさめ細かさが、臉を頬のあたり、はんのりと紅くなつて、取繕はぬ髪の後毛幾條か亂れかゝつたさまは、其上畫中の人、頼四郎今迄見たお今の姿の中で最も美はしい姿致よと思つた

「お一人ですか、兄は何うしました。大層心配さうな御様子

だが何うしたのです。」

「否、何有、何んども致したのではございせんが。」

と、手扇を取出して、汗ばんだ小鼻のあたりを拭ひながら、

其のまま片頬に押當て、

「其に昨夕は何ういふものですか、些とも寝られなかつたも

のですから。」

「然うでしたか。勿論此方は兎角騒々しくつて可かんですよ

其で兄は何うしたのです、何かまた貴女のお身の上に就い

て談でもありはしませんでしたか。」

「別に妾の前では是と謂つてお話もございませんでしたか。」

と、言淀み、急に悲し胸に振來る涙を、辛うじて一片の半

扇に抑へて居た。

「また母が何んとか謂つたですか。屹度然うでせう。兄も一緒ぢや無かつたですか。一緒に。は。其は怪しからん。まあ僕に仔細を開かせると可いのです。兄も此の頃は大分商賣の方の智恵が出て来た代り、根性は甚く冷になつたやうですかな。」
何故か、お今は斯の言に又更に胸を轟かした。

三十一

「貴方暑かおとさいますせんか。」
と、お今は密と頼四郎の面を覗めた。

「では彼の樹蔭へ参りませうか。」
見送る彼方には、五六本の胡桃の木立が、鈴嚙と葉を繁らして居たのであつた。
「でも貴方は、何處へかお出かけなさるのでございませう。」
「何有、家に居ても退屈なつたですから、ぶら／＼と散歩に出掛けたいところです。」
「左様でございしましたか。」
と、兩人は徐に歩み出した。野中に立てる一叢の胡桃の木蔭へ立寄れば、風習々と動いて、快さといふのは無い。
「眞箇に涼しうございませうとね。」
と微笑むお今の面には、涙の痕の何時か拭ひ去られて、其の姿致は活々とする。
「あの、園に居た時でございましたの。」

「何んです。」

「健三様とも新様風に……ね、木立の下でお話をした事が

ございましてたつけ。其の時は真箇に新様苦勞をしやうとも

思ひませんで、まあ那様に面白い事でございましてらう。

「其の時は兄の心も消かつたのですよ。」

「真箇でございませぬね。其が何んだつて彼如も心の變つた

ものでございませう。」

と、謂つて、ふいと憶出したやうに、

「貴方、貴方は八重子さんといふ方を御存知で在りしやいま

すか。」

「八重子！」

と、頼四郎は宛然、己が心の底の底に秘めた秘密でも發かれ

やうに、憤然とする。其の眼を圓くして、些とばかり口を啓

す。

「お知りではございませんの。」

「否、話には聞いて居るですが……。」

と言は濁つて居た。

「好いお嬢様ですことね。」

「然うですか。其をまた貴女が何うして！。何んですか、八

重子の話でも出たのですか。」

「鳥渡お話も聞いたのでございしますが、何んですことねね。

大層御縁致が好くつて、容子の好い方でございますのね。

そして大層學問もお有んなさるんだといふんぢやありません

んか。何方のお嬢様でございます。」

「知らんです。が、貴女、其の八重子といふお轉婆……、何

有女を見ただですか。」

「は。一
見たですか。」

「はい、熱く見ました。而して何んだといふんぢやありませんか。彼の方が何んだか健三様の……、ね、然うなんでせう。奥様にお成んなさるのでございませう。」

「那樣事はあります。」

「お隠しなすつては嫌、ね、然うなのでございませう。」

「嘘です。」

「嘘だと有仰つても、阿母様が是非貴ふのだとか言つて在有しやいませう。」

「母がですか。」

「は。一」

「最も那樣話も無かつたのぢやない、實は有つたです、母が

「躍起となつて主張はしどつたですが。」

と、憂慮はしさうに今の面を見て、

「併し貴方は、其の關係を悉皆お聞きなすつたのですか。ま

たは……。」

「然うでございます。聞くとはなしに遂耳に入つたのでござ
います……。ですから最う妾はお暇申して國へ歸らうかと存
じますの。貴方が幾骨を折つて下さいしても、八重子さ
んのやうな方があるのに、妾が何うしやうといふは無理な
事なのでございすもの、ね、然うぢやございませんか
妾は最う、昨夕で悉皆歸めて了ひました。はい、決心致し
ました。」

と、手帛を咬んで嗚咽げる。

頼四郎は愁然として、

「またお泣きですか。どうか泣かずに下さい。僕は其の貴女に泣かれると……。」
と、紛らす眼は涙がさらりと滲いて居た。」

三

三十二

「妾は這馬鹿ですから。那樣御相談のある事は些も知らないので、遙々東京まで恥を晒しに参りましたの、今では恥しくつて眞箇に穴へでも入りたい心持が致します、一層お手紙を綴かなかつたら這馬鹿を晒らすやうな事も無かつたのでございませうけれど……と申しましても、何も貴方の

御存知の事ぢやございせ。まんが」
と、お今は心苦しさに耐へぬかのやうに、前後左右に身を動かして、胡桃の木立を其處這處と彷徨き出した。
頼四郎は、今は寧ろ一種の畏怖を有つて、

「お今様」

と、渠が眞面目な時に聞かれる沈痛な聲で呼掛けた。

「貴女は何故、然う歸る歸ると有仰るのです、僕甚だ不愉快です。甚だ失禮ではあるですが、僕關はずに……忌憚なく聞へば、ですね。貴女は眞實兄を戀つて在有つしやるか何うか、其が疑はしう。」

「何んです。」

と、お今は思はず立停つて了つた。

「いやさ、貴女は國へ歸る事を其程幸福に思つて居るですか

其が名譽であるですか。また潔白であるですか、但し貞操
であるですか。」

「那樣難かしい事を有仰つたつて、妾解らない事よ。」
と邪氣も無く笑つて、面を赧めて居る。

頼四郎は言過したと思つたのでもあらうか、

「いゝね。貴女はですよ、阿母さんの乳が那樣に飲みたい
か、疾く言へば斯うなのです。ね、解つたですか。」

「解りました。」

と、所故らしく輕快に言つて、日光の洩れ来る胡桃の葉裏を

向上げながら、

「貴方には種々御心配を懸けますが、考へて見ますとね、妾

は歸るよりか他に仕様が無いのですもの。」

と、聲を顫はして居た。

「よろしい！兄が嫌なれば。」

と、頼四郎は突然大聲に叫出して、

「僕娶ひます。」

「エッ、何んですつて！」

と、お今は今更のやうに健三が言の端々も思合はされて、胸

は激しく跳り出した。

「さ、假令娶つてもですね、貴女は國へは歸さんと言ふ事

です。」

「ま、勝手な事を……。」

「否、勝手では無いです、僕恐らく貴女の分別を洞察して居

る、可いですが、國へ歸ると有仰つても、貴女の氣象とし

て決して國へ歸りはなさらん、何うです、巧く適りました

らう僕なか／＼人相見ですよ。」

「國へ歸らないなんて、那樣事があるものですか。」

「嘘をお吐きなさい！」

「……嘘だと致しますと！」

「申しませうか。」

「は。」

「涼車の軌道の上か、川の底か、其れが貴女のお國なのでせう。」

「エッ、………どんでも無い事をッ。」

「と言つても駄目です、可かんです。僕、ちやあんと知つて居るです。」

と、得意になつて頬を撫て居る。

お今は黙つて俯いて了つた。

頼四郎は如才無く、

「貴女、這處處で話をして居ますと、人の疑を招く因ですか

ら、兎も角家へ行かうぢやありませんか。」

「左様でございますね。」

と、か今の返事の方無さといふものは、

樹立を出て歩みながら、

「那樣に氣を揉んだつて為様が無いですよ。兄が悉皆八重子

の方へ傾いて居るのなら、兎も角ですね、尙だ然うと定つ

たでは無いですから、少時我慢なすつて。」

「はい、然う親切に有仰つて下さるのは眞箇に貴方お一人、

……妾お什麼にか悦しうございませう。」

と、口では言つて居るが腹の底で、小さい聲がして、さも意

地悪さうに、

「おい、おい、お今さん、大層暢氣だね。寧死んで了つた方

が可かあないか、頼四郎の云ふ事だつてあてになるものか
 一つ穴の狐だせ、第一兄が嫌へば俺が貰ふと云ふのが、先
 方に企謀がある事で、健三と八重子を夫婦にする時、お前
 の身の振方に困るから、幸獨身者だし一家相話の上で爲方
 が無い時はお前を頼四郎の女房にしやうと言ふのだ、健三
 が言つた言と能く照合して見な！ 大概様子が知れさうな
 ものだ、其處で頼四郎がお前に親切なんだ。が其も芝居と
 すればお座が冷めらあ？」
 はつと氣が付くと、其はお今が我と我に語つて居る邪推であ
 った、
 頼四郎はと見ると、妙に、冷に莞爾笑つて居つた。こいつ悪
 魔奴。

六

三十三

家へ歸つて來ると、國子は瞋き眼に兩人の姿を見て、
 「おや！ お揃で何方から、相變らず大層仲が好くつて在し
 やますこと。」
 と謂へど、お今は耳にも懸けず、軽く會釋したまふ急いで我
 が居室へと入つて了つた。
 後に國子は頼四郎を促へて、
 「ちよいと頼さん何うしたの、赤羽まで行つて來ると謂つて
 お在有だつた癖に。」
 「何有、餘り暑いから休にして了つたのさ。」
 「お今さんは何んだか大變顔色を悪くして、つくつくして居

光

るぢやないか、道々で喧嘩でもお始めだつたの、餘り仲が

好すぎで……。」

「相變らず皮肉を謂つてるね、一寸お今さんの心にもなつて見るさ。」

「おやく、大變御機嫌を損じましたね、ですが譯も知らないものが、何うしてお今様の心になれませう。」

「姉さんはお今様の事と謂ふと、可厭味ばかり並べて居るのさね。」

と、いひつゝ慌忙しく立起つて、奥の方へ行かうとすると、國子は後を目送つて、

「また御機嫌伺か、眞箇に娘孝行の事つたね。」

頼四郎はお今の氣色の氣遣はしさに、其の室へと来て見るにお今は身を打頭はして、揺もしるるに取亂しつゝ、盥の上

儲伏して忍泣。

「お今様何うしましたね、何故泣くのです。泣いたつて爲様

が無いちやありませんか。さ、さ、何も那塵に……。」

と、敷居際に不んで膝し慰めるに、今は辛々身を起して、

「口惜しうございますわ。」

「其は然うでございませうが、ね、お今様短氣は起さんが可い

「もう放擲つといつて下さいまし、妾は這塵我儘者なのでござ

いますから、介つて下さらないが可うございます。」

と見上げる眼は尙涙に曇つて、臉は赤く脹れて居た。

「ですがね貴女、今日にも兄が來ませうから、來ましたら僕

から、篤と精神を聞いて見る事に致します。其の返事に依

つてゝすね、貴女も何んとか決心なさるがよし、及ばすな

三十一
から僕もまた御相談は承けるです、母は頑固で姉は彼の皮肉屋ですから、彼の人等の謂ふ事は耳を傾ける價は無いです。」

と、頼四郎は我ながら女々しと居はるゝまで、お今を宥めたお今は愈胸迫りて、歎かけてのみ居たが、漸に氣を取直して「大變貴方に御心配をかけますね、妾は何うして斯麼苦勞性なのでございませう。」

「否、決して苦勞性といふ譯ぢやありませんが、局外の僕さへ痾に障る位ですもの、口惜しいのも當然でございませう。僕にも丁度那樣事がありましたよ。」

「はッ、貴方に。」
「然うです。僕だつて人ですもの。お恥しい次第ではあるですが、一度は那麼熱い湯を飲ませられて、甚く窘しめられ

て、大した火傷をしたですよ。併し今では悉皆忘れて了つたです、は。人間は忘れるので助かりますな、忘れられんかつたら大變です。ま、死！、然う死ぬより他はありませぬよ。」

三十四

頼四郎が尙だ學生の頃であつた。親しみ深い友人に某といふ妹があつた。友人とは極めて親しい間であつたので、何時か妹にも交際を許されて、戀草は若さが互の胸に美はしく萌出した。二年餘といふものは、いよく忘れ難い思を募らして

居たが、頼四郎が卒業間近になつた時、其の少女は双親の嚴命厭し難しと謂つて、他家に嫁いて了つた。以來頼四郎は多情多恨の人となつて了つたのである。

で頼四郎は今も、其の友人の情誼に薄く、妹なるものゝ心さまの浮薄であつたのを、何分か怨と思つて居たのであつた。

「其の妹といふ女が、でしたね、何うも姿致の邪氣の無い点が、能く貴方に似て居つたのですな。無論氣立は浮薄な都育

と、貴女とは較物になつたものぢやありませんが。」
「でも妾の方は間拔でございますから五分々々でございませう。」

「お今は覺はす戲言を謂つたのであつた。何うして！」
「貴女が間拔をこゝろですか。」

「馬鹿な方でございますか。」

と、莞爾して、

「ではお話の様子では、先方が貴方を欺したのですから、這度は廻と立優つた奥様をお貰ひ遊ばしな。」

「其から最う一つある。是は故障は無かつたですけれど、友人に奪はれて了つたです。女の心は動き易いもので、到底信用が出来無いものと、つくづく感じて了つたのは其時

です。ですから一切其様事は断念して了つて、一層コニー

ギコヤの方へでも行かうと思ふんです。兄は私に較べると非常に幸福者です。何故なれば六年の問心の漁らなかつた

貴女があるんですもの、其を放逐つて了ふやうでは實に残忍酷薄と謂はんければなりません。」

「其の後御縁談も無いのでございますか。」
「母の方から勧めたのもあつたですけれど、母は何時でも經

三六
濟向の妻君を選ぶですから、其は到底僕には向かんです。
金満家の妾の子だの、華族の畸形だの、と、謂つた風に殆
ど言語同断の者ばかり持込むです。
「何んだつて、また那麼ものをお選びなさるんでございませ
う。」

「知れた事です、其は次男ですから、財産を別けると謂つて
も大した財産が無いものですから、寧ろ本人に少しは欠点
があつても持参金でも多い方といふやうな、卑劣な者から
なのでございませう。」

「では八重子様のお家なぞも矢張、然う謂つたやうなお家柄
なので。」

「無論然うなんでも、農商務省の古い官吏なんです、儘か特
許局か何かの。」

「健三様は八重子さんを何と謂つて在有しやるんです、大層
深いお馴染の御躰子ですが。」

「何有然ういふ譯でも無いのでございませう。去年の今頃の
事でごさいましたらうか、一度は八重子と……と謂ふのに
定つて居たのですが、八重子が餘り優しくないので、すから
兄は今では最う、悉皆嫌氣が差して居るんでせう。」

斯の話の最中に、健三は今が一人王子へ歸つたと聞いて、
或は昨夕、母の彈劾の言を小耳に挟んで、例時のやうに修羅
を燃し、我には一言の挨拶も無く辭し去つたので、無いかと
頻に氣遣はるゝまゝ、急ぎお今の後を追つて健三が王子へ着
いたのは、午後の一時期であつた。

「お今は」
茶の間へ飛込んで

と聞くど、

「頼さんとお話最中なの。」

と、國子の答であつた。聞くに健三は何とは知らず不快の念の一時にひらくと起つて、眼の底には凄じい光を帯び來たが、聽て太い溜息を吐いて、

「私は這麼困つた事は無い、阿母様は理の解らない事を謂ふし、お今はお今で不貞で居るし、一層最う國へ歸して了はうか知らん、私は一生妻を有つまいッ」

三十五

少時すると頼四郎は、お今の室を出て二階へ上がらうとする

途端。國子は目早く其と見つけて、目色もて塵くに、頼四郎は小戻して健三が側に座つた。

「何うしたね、お今はまた何か愚痴を謂つて居たのか。」

「些とは愚痴も謂つて居やうさ。そして歸るなんて謂つてるよ、可哀さうさね、兄様も一休何うしたんです。」

「何うも爲やせんさ。……私も最う面倒臭くなつたから歸りたいといふのなら歸して了はうか知らん。詰らない!。」

健三は心の底から思つて居るのではあるまいが、婚儀の意のまゝならぬに較憤れ氣味に自棄根性となつて居るのである。

頼四郎は憫れた面色で、

「何有、歸すんだとね、兄様!。那麼無法な事を謂ふは無い

ね、一休甚麼者なんだね。今更になつて歸すの歸さんのつ

て那樣無法な事があるものか……すると兄様は、婦人一人
を欺したも同じ譯ぢやないか。那樣不徳な……。」

健三はおのが言の誤といふ事を想至らぬでは無いが、何ん
なく胸のうち搔亂れて、平生の若實静穩なものには似ず、言荒
かに、

「無法も何もあつたものぢやない。阿母さんは阿母さんの勝
手、私は私の勝手、お今はまたお今の勝手にするがよし、
其でお前が何んとか思ふなら、お前はまたお前一己の勝手
で、お今を貰つても可いよ。」

「けんもはるゝの返事。
然うすると可いね。其ども歸すんならお盃の濟まないうら
準備にかゝらない處で歸して了ふと可いわ。」

と、國子は嘴を容れた。

「姉さんなんかは黙つて居なさいッ。」

と、頼四郎は一面に姉を制へて、面は赧く、眼のうらに血潮
を湛へ、殆ど逆上した氣色で兄に喰つて蒐つた。

「兄様、そ、そりや何を謂ふのだ、僕が何んか斯の結婚の魔
邪でもして居るやうに！ 一体僕が何んの爲にお今様を貰
ふのだね。」

「何んのため？ だからお氣に召したらと謂てるぢやないか
加之大層仲が好くつて話が合ふとかいふぢやないか其處は
本人同士で相談づくでね。」

と、健三は嘲けるやうな調子で頼四郎を揶揄はんとした。
「怪しからん！ 實に意外だね。」

と、座直して

「然うさ、其は兄様の留主の間は放擲とく瞬にも行かんから
 多少往來もし慰めもしたのさ、其に向つて感謝こそすべき
 筈なのに、那樣無法な……然うさ、今も話して居つた、突
 伏して泣いて居つたから、賺して居たんだ、別に不思儀は
 無いぢやないか。もし是が不思儀なら、早く何んどかお今
 様の胸の安まるやうに、お決めなさい、僕は好んで往來す
 るのぢやない、見るに忍びないからなんだ。寧ろ兄様の冷
 淡なのを驚いて居る位のもんだ。行つて慰めて與る位は當
 然の事だらう。」
 「私が何が冷淡なんだ。また私はお前のやうに女々しい事は
 嫌ひだから。」
 「私は無論女々しい。然し衆が最う些と女々しくなくつては
 將來他人を交へる日には到底家庭の和樂は保てないといふ

事を承知なさい。姉さんも阿母さんも、も少し女々しくな
 つて欲しいものだ。」
 「生意氣を謂ふな、私が歸すんだ、お前の容喙する限で無
 事。」
 ど、威丈高になつて健三は呵喝した、論は用なしと、頼四郎
 は怒氣忿々として、足音荒く階上へ登つて行つた。

三三六

健三はふらくと起上つて、何を思つたのか、一散にお今の
 室を指して行く、お今は今しも襖の外まで来て、兩人の口論

を耳に發てゝ居たが人の來る氣勢に、慌しく取つて還す後か

三四

ら、健三は荒かな調子で呼掛けた。

「お前其處に居たのか、何んのために那處どころに立つて居

たんだこりや立聴をして居つたのだな怪しからん。お今、

然うたらう、何有、然うで無いことがあるものか偽許り！

怪しからん！何時の間に那處悪い智恵が附いたんだ。は

お今、然うで無いものが何んの爲に斯處處に立つてゐたん

だ、さあ、泣いたつて爲様が無い、おやく、是ぢや手が

附けられん。」

と、お今の前に座る。

健三は心の内で、もし斯の一場の争論をお今が聴いたらば、

我はそも什麼に冷酷無情の人と思ふであらうかと思ふと、情

人の所思も慚かしく、且は昨夕の始末も辯解して、恐氣付い

た少女が心を慰めんと思はぬでも無いが、頼四郎が激しい打
撃に廻られた胸は、今や麻の如くに攪亂れて、理非は既に遠
く渠が形骸を逸して了つたばかりで無く、立聴したお今が姿
を見ると等しく、不快の念は増々執拗に其の心頭に粘り付い
た。

彼はお今を愛をしむ心の深さだけに、お今の前では飽迄体面

を保たんとどの自尊心高きに、母の讒訴をさへ耳にして、婚は

親、姉の爲に沮まれ、己が手紙に言遣はせし事の較どもすれ

ば反古とならんとする氣勢を悟られし上に、頼四郎には目前

激しき攻撃を被りたるさへ立聴されたかと思ふと、却つてお

今に辛く當つて己が鬱悶を拂ひ、且つ己が体面を装はむとて

心にも無い冷語を放つてお今を窘しめるのであつた。

お今は其とも知らず、健三が心の氷のやうに冷いばかりか、

三五

今は科も無い我を荒々しく罵るに至つては、言語同断とや謂はむ。人外とや謂はむ。さては健三とてもお定國子に劣らぬ意地悪者よ。ど、思ふと、力も抜けて了つて、壘の上に突伏して、口惜涙に咽入るばかりであつた。
「だがね、お今、能く私の謂ふ事を聞いて呉れ、お、開分け
て呉れんか。」

「否、聴かなくつても解つて居ます。」
「何有解つて居る?.....、何かい、頼田郎の謂ふ事で無くつては解らんのかい、怪しからん事つたね。私が歸つて了へば可いに! 謂つたが、其が何うした?」
「ですから、妾は.....妾は歸ります、はい、歸りますから。」
「歸る?.....、ね。よろしい! お歸んなさい、一向差支はあ

りません、お前の自由ですから、私は敢て止めはせんよ。
併しお前は、私を誤解して居るね、確に!」
「何が誤解でございませう。貴方こそ何んでも秘して在有しやる癖に!」

斯は明に健三の胸の急所を射たのであつた。

「何、何、何んだとね。私はお前に何を秘して居るだらう。お前は何んでも聞かずには其で種々と邪推するから可かん何故儼乎と優しくして居られないのだ。優しくさへして居れば、私が何んだつて約束を反古にするものか。お今!、お前はね、何んでも自分から事を破るんだ。」
「何故でございます。」
「何故といふ奴があるものか、現在種々な事を弟に聞つて居ぢやないか。癖んだ根性で何んでも聴かづちや弟の處へ持

つて行く。那樣奴があるものか。其では將來到底家を治めて行くのは難しからう。お母さんの心配するのも無理は無

「何も妾は喋舌りは致しません。」

「何有、喋舌らん事があるものか。現在今も喋舌つて居たりやないか。斯の間も喋舌つて居たりやないか。優しい女だと思つて居たら大變な浮氣者だ。呆れたもんだ……。私も少々驚いて居るんだよ。」

三十七

國子は寧ろ好奇の心に驅られて、室の外まで来て容子を窺つ

て居た。餘り健三の見脈の劇しさに、衝と室に入つて、

「何うしたの健さん、お可哀さうに那麼に酷い事を謂ふものぢやないわ。謂ふ事があるなら、最つと優しく謂つたつて解るぢやないか。お今様も優しくしてお在有なされば可いに、何か口返答をなすつたの、可いませぬね。何も又斯様に、何を神妙に聞いてる事は無いぢやありませんか。彼方へか出なさい。お可厭？ 何故？ まあ剛情なのね、何を那麼に腹を立て、在有つしやるの何も那麼に口惜しい事も無いぢやありませんか。」

「否、可うございますから、放擲つといて下さいまし。」

「ぢや、お介ひ申さなくつても可いんですね、然うですか、まぬ。」

と、嘲けるやうに微笑した。

「姉さん、何を謂つてるんだ、可いよ。私は尙だお今に謂つて聞かせる事があるのだから。」

國子は健三は、ちらと白い眼を見せて、さつくと室を出て行つて了つた。お今はやうく涙一杯の面を振あげて、何事

か、謂出さんとはすれど、小さい胸には種々の思の亂れて、又も錯伏して、よ、よと泣く。健三は軟勢を失つた様子で、

「お今、何か謂ふ事があるのか、は、聞かうぢやないか、一體何ういふ考で來たのだ。」

と、これはまた意外な問。お今は焦燥して、
「何うせ妾は……妾は歸りますから。」
「よよく歸るね、吃度。」

「は、ソ。」

「歸るね。」

お今は腹上げて、何も那麽に難癖をおつけなさらなくつても。」

と、較少時考へて居て、
「妾はもう歸りませう。貴方はまた何故……、有仰る事が

あるなら、靜に愼々だを有仰つては下さいます、何が那様にお氣に障つて……、妾には些ども解らないんですも

の。ですけど今となつて何んど申上げたことで。」
と、突俯して了つた。

「だがねお今。」
と、健三は所故冷笑つて、お今の横面を覗き込みながら、

「憚なんだ、まづ私の謂ふ事も聞いて欲しいんだ、は、お今

お前不貞てるね。よるしい。不貞てる者に駄辯も無駄かい。歸るが可いさ。お歸んなさい。詰らん！……され」
と大仰な掛間で起上つたが、お今は尙も身動もせず居た。
健三は張合が抜けて、其刻躊躇つて居て、また引返して、

「だがねお今。」

と言を優しくして、密と背を揺つて見ながら

「尙だ泣いて居るのか、大概にせんか、おい。全体何ういふ

考なのだ、國へ歸らうといふのは。」

と、抱起さうとする……。お今はわれにも非らず五體を剛張

らして、緊手と畳に御囁付いて居た。其の剛情！

「何んだだ？ 女の癖に。歸りたくは歸りなさい。馬鹿々々

し。」

と、健三は業を煮やして、ふいと室を出て行つて了つた。茶

の間へ來ると、

「お今様は何うする心算なの、健さん。」

「いや、呆れて了つた。彼女の剛情には。」

と、冷に笑つた。が、心の底には今一度言を穩にして、昨夕

の始末なを辯解せんどの思ひが満々として居るのであつた。と

は知らずに、

「頼様と取換て了ふと可いね？」

と、園子は口を滑らした。健三は急かに眉の間に不快な色を

呈はして、

「全体姉様等が非い、何んとか庇護つて與つてくれれば可

いのに、歸すの歸さないの、取換へるの取換ぬのつて、人

間らしくも無い事ばかり謂つてるのだもの。」

「あら！ 妾にまで飛沫、……嫌な健さんだ……迷惑ね。」

國子は面白さうに笑出した。

三十八

國らず國子とも一場の言争を惹起して、健三は三橋が家を立
出て、上野へ着いたのは日の暮近き頃であつた。其處より歩
みて家に歸るともなしに彷徨ふうち、何時か下谷練堀町なる
八重子が家近く来て居たのに、我にも非らず胸を蕪かして、
もし偶然に八重子に出會ひでもしては面白からずと、漫怖を
抱きて歩を運べば、何の琴の音の漏れ来るは、疾や八重子の
家近くに居たのである。

國代と記された軒洋燈の灯された新築の棟は正しく其の人
の家なるに、何んもなく立來りたい心地もして、殿々と門ま
で進み入る……と、お今の突伏して泣き居る姿の歴々と眼
の前に浮ぶに、頸元よりふるくと寒氣を起して、思はずも
倉皇二三歩後に退かんとする時

「磯川さん……。」

と、頓狂な聲で呼掛けた者がある。脊然として願背ると、
「誰方かと思つて居たんでございますの、其處が開かないん
でございませすの、さあ何うかまあ、お入んなすつて下さい
まし。」

と、先に進まれて、健三は不承く内に入つた。琴の音は
確と休んだ。
折しも父も母も在らで八重子は一人座敷の縁近く座を占めて

獨、琴を奏つて居るのであつた。下女の報に出迎へて、
「什麼風が吹廻つたんでございます、……能く入來しやつて
下さいました。」

八重子は今は某の師團にある中尉の兄を除くの外、姉と妹と
を有つて居たが、何れも夭死して了つて、國代の娘どては八
重子ばかりの所謂一粒種。されば兩親の寵愛一身に集つて、
教育はをさく兄に劣るまじく躱られた。物心づく頃から多
病の性質であつたので、自然放縱に育てられて、其の請の全
て聽されぬと謂ふ事が無かつた。婚姻さへ其の心に任して、
人物位置財産だと相當しくば、誰にても好む方へ嫁ぐべしと
實に歐化風の育方であつた。健三とは父と父との關係よりし
相知る間であつたが、演劇花見、日常の往來など自由に交際
を宥されて、馴々しさに失する傾もあつたが、敢て咎も蒙ら

なかつた。健三はさして八重子を好むといふでは無いが、世
に希らしく自由の交際を宥さるゝと、其の性質の生意氣に傾
いて居るに、朝夕の往來には却つて興ある心地して、一時は
深くも心を感はされて居たのであつた。今でさへ、お今さへ
居らすば、愛は全く八重子に集まるのであるが、然ればと謂
つて不思議は、百年の苦勞を共にしやうとも思はなかつた。
が、健三の心を深く知らぬ八重子は、日を追うて健三に狎れ
むとするは、明に樂しき未來を夢みて居るのであつた。
健三は何んど無く心の底を探られるやうな心地して、例時の
やうに打解けぬに、八重子は其とも心着かぬか、
「大層お顔の色が可いちやありませんか。そして何んですね
は。妙に戀いで在有しやいますのね。今日は何方へ?。」
「王子から参りました。」

「王子？　嘘！　王子に戯者が居ますの………數寄屋町の間違
ではございせん。」

「どんでも無い事です。」

「時に先日は失禮致しました、お連のか有んなさるのに些も
気が着かなかつたものですから後で極が悪くございました
わ、彼は誰方？　戀人………では無くつて。秘密？　大
層綺麗な方だつて阿母さんと然う謂つて居ましたの。御親
戚の方？」

「はア。」

と、狼狽した返事をする。

「何うですか。」

と、冷な眼で健三を睨つた。

三十九

八重子は較沮げた状で、

「今日は阿父さんは宴會だつてお留守ですし、阿母様は今方
鳥渡使に出たのでございますから、直に歸りませうですか
ら御寛りなさいまし。お夕飯は？　お済みになつたんです
の、ではお茶でも一つ召食つて下さいましな。」

と、愛想して、急に憶出したやうに、
「貴方、ちよいと健三さん。淡島といふ方御存じ、矢張り昨
々年の卒業生で、背の高い、金縁の眼鏡をかけた氣障な人。
貴方を知つてゐるつて然う謂つて居ましたよ。」

「能く知りませんな。併し會つたら……。」

「然う！、では最うお忘れなすたんでせう。」

「其が何うしたんですか。」

「何、可笑しいの。阿父様の下役になつたんださうですが、

ちよくく家へ遣つて來ますの。彼でも大層刑巧なんです

つてね。可笑しいぢやありませんか。」

と、意味ありげに微笑つて見せる。

「刑巧だから刑巧なんでせう。何も可笑しい事は爲いぢやあ

りませんか。」

「其が……。」

と、言差して、さつと面を紅くして

「妾が欲いでございますと。」

と、健三の面を見る——横の方から——。

「結構ですね。」

「あら！、餘り結構でも無い事よ。何んですつて、何んでも

「妾が取次をした事がありましたので見覺はて了つたんです

つてね。そして妾が知りもしないので、先方では能く途中

でお見掛け申しましたが、此方の合嬢などは夢にも知らな

かつた！、と申しますの。眞箇に可厭な奴つたら……免職

にでもして了ふと可いんですけれど、役に立つといふのな

ら、まあ爲様がありませんね。」

「其から何うしました。」

と、健三は面倒な！、といふ面を返事をした。

「何しろ父が氣に入つて居ますから、或は……。」

「或は……、が何うしました。」

「嫌な磯川さん、大概解つて居やうぢやありませんか。」

「然うですか。では大概お決めなすつたんで。結婚な御縁ぢやありませんか。」
八重子は不平らしい面をして、

「まあ、結構だか何んだか知りませんが、妾は那方方は嫌ひですわ。ですから最う辭つて了ひました。」

「ですが、八重子さん、慥う申しては失禮ですが、自由結婚なんて何ものは一利一害で……日本の社會では尙だ早過ぎるかしら、矢張親の見立に小言を謂はないのが、結局削巧といふものですな。私なども悉皆其の方針に變へて了つたですよ。」

「ですけれど磯川さん、親も許し本人も好んでゐるのなら、尙更結構でせう。阿父さんの氣にばかり入つて居ましても甚座人だか氣心も解らない人と夫婦になるなんぞは、餘り

智慧のあつた話ぢやありませんまい。矢張一年なり二年なりお眠近になつて居ましてね、氣心を知り合つた上で夫婦になりますのが歐化主義に適つて居るぢやありませんか。文明的ではありませんか。好きもしない方ど壓制で以て爲方なしに夫婦になつてございますよ、何時も家庭が紛糾して居て御覽なさい、世の中には是程詰らない事はありますま

501

と、女丈夫といふ意氣込で辨じつける。

健三は、けるりとして聞かざるものゝ如き氣振であつた。
八重子は急燥つて、

「貴方は大層冷淡で在有しやいますのね。」

「何故ですか。」

「何故でございますかね。妾は知りませんわ。時に磯川さん

先日のお達は奥様ではございませぬかつてね、母が申して居りますんですよ、然うぢやなくつて、妾なんぞは一向氣も付きませんでしただけども母がでございますよ。母が然うぢやないかつて申して居りましたの。然うなんですか、眞箇に。」

三四

四 十

八重子が詰るが如き話の間に、母親は湯より歸つて来て、白けた座は又一時賑はしくなつた。半時ばかりも経つてから、健三は母親が話の合點にも飽きたのか、疾や歸らむといふを

母親は引留めて、

「ま、可いではございませぬか、八重やお前また何か氣に障つた事でも謂つたのぢやないかね。眞箇に遠慮なしに何でもお辯りだから因つて了ふ。」

と、娘を叱るやら、健三を操すやら。

健三は極悪げに起ちも爲兼て居ると、八重子は憤れつたさうに、

「だつて仕方がないわ。妾にはお客様のお對手が出來ないのだもの。」

健三は再び座に就いて固くなつて居ると、母子の間には何か囁事のせられて、

「健三様、變な事を伺ふやうですが、伺ふ事は伺ひませんと何んでございますから。他でもございませぬが。」

三五

と、母親は妙に眞面目になつて、

「先達の若いお方は若しや奥様ではございませんか。あの阿
母様からは那麽お話も承はりませんでございますから、正
可とは思つて居りますすが、伺つて見ないうちは、又甚麽御
都合になつて居りますか。」

「彼ですか。」

と、健三は常惑して、

「彼は其の何んでございます。田舎の親戚の娘なのでござい
す。」

ま辛うじて鬨抜けた。

「然うでございますか、其ならば可うございますかね、もし
奥様であつたり致しますと、お母様とお約束申した事も
ございますから、其に入重も最う年頃でございますで、ちよ

くく 申込もございますやうな、ね、譯なのでございます

から。」

「母と何かお約束がございますので。」

「貴方さへお差支がございせん、何うか入重をといふ事
にお約束致しましたので。其に入重も知らぬ方よりは磯川
様なら行つて見たいと申して居りますから、ければ貴方に
も又甚麽お考があるか知れせんわ、ね。誰能く例も來
て下さつて、愛想好くして下さるのは貴方ばかりですから
もし那麽お考でもお有んなさるかど、失禮ではございませ
が、思つて居つたのでございます、何れ阿母様からもお聞
きなさいましたでせうけど。」

「否、母からは一向那麽事は承はりません、然し思召は實に
有難うございます。が御存知の通り、未だ事業も辛々益

相償ふ位のものでございますし、家内は大勢であるで
妹は二人も居りますし、弟も相變らすぶらく致して居り
ますし、其に年寄は年寄で我張つて居りますから、なかな
か八重子様をお貸ひ申すも開ひましても、双方の不利益か
と思ふですよ。到底八重子様が来て下さつても、却つて何
んでございますから、是は私の方から御辭退致します。」
八重子は何時か座を外して居た。」

「其は我儘に育つて居りますから、然うお考へなされるもの御
道理でございませうが、其の邊は能く私共から開閉せませう
し、八重も望んで居るのでございませうから、其處等には御
掛念は要りませう。」
「猶母からも申上げさせますが、私はまゝ御辭退申しますか
ら、悪しからず……。」

「那麽に鹿爪らしく有仰つては、物が申し惜うございませうが
では矢張八重子ではお氣に召しませんので、呑込が悪うご
ざいますから、然うなら然うと有仰つて下さいまし。實は
那麽に可愛がつて下さるんですから、何うか夫婦に出来る
ものならばと早合点をして下さつたものですから、大層失禮
な事を申しました。」

と、兼味たらく。娘を聚つて欲しさの手詰の腰談とは知ら
れた。諾ふべきか、否むべきか、健三はそも何んと返事をし
て可いのであらう。

「否、どんでも無いッ！。然うお取んなすつては實に迷惑でございます。悦んで、否、進んで望む縁なのでございませうが、今申す通りの譯なのでございますから。」

と、謂ふ苦しさ。膏汗はじりくど背に泌み出て居た。

「貴方もなかくお口が巧くつて在有しやるんですね。」

「那、譯でもございませんが。」

「では、矢張何んなのでございますか、八重ではお可厭なもので。」

「否、私には那、勝手がましい考があるのぢやございません

が、分に過ぎて居りますから。」

「でも分に過ぎる位の事は我慢をなすつて下すつたつて可いぢやありませんか。折角八重も那、に申して居りますのを今更何んするのも不便でございますから。」

「困るですな……。」

「お困んなさるんぢや失禮でございませうが、同然先日のお娘御は奥様なのでございませう。其ならば其と有仰つて下さいますし。然う致しますと八重の方は私が叱りまして。」

此に至つて健三は默然として居た。

母は詮方無く、

「では何れ阿母様の方から御返事を承りませう。詰らん事を申しまして嘸お懊惱くつて在有しやいましたらう。八重やお茶を煎れかへて上げな。」

と、娘を呼立てる。八重子は有繫に面眩げに立出たが、怨を帯びた眼に健三を一目見て、逡巡しながら母の傍に座を占めた。健三は快げに雑話を始めたが、何時か三人の間に笑聲が起つた。健三は纏て歸らんとして立起れば、兩人は送り出て、

「眞箇に今夜は失禮を申し上げました。」

「阿母さん、まだ早いやうでございますから、あれを、ね、

買つたりしたうございますから、御一緒に参りませう。磯川さん其處まで御迷惑でもお供致しませう。お厭？」

「何う致しまして、さあ〜参りませう。」

と、健三は熊と氣輕に言つた。

母は口を噤れて、

「お前明日でも可いぢやないかね。健三様が御迷惑でござい

ませうに。然う、では仕方がありません、女中をつれてお出なさい。」

かくて健三は八重子と女中とを従へて、國代の門を出た。八重子は、ひたと健三に寄添つて、背ながら寂しい町を歩み行

く。「お母様は貴方に何ぞお話があつたでございませう。」

と、八重子は氣遣はしげに尋ねた。

「お聞きでもございませうが、貴女を娶つて呉れるとい

ふお話なので。」

と、健三は垂頭しながら、氣の無い返事であつた。

「否、些も聞きませんでしたよ。ですが貴方は何ういふお者なんですの。貴方にお差支が無ければ私は眞箇に甚麽に嬉しいか知れやしません、多分お厭なのでございませう。」

と、低聲で獨語やうに謂つた。元來物に應せぬ性質ではあるが、八重子が此の時の如く鉄面皮しい場合も多く無かつたのであつた。で、健三は内心に呆れて、依然として垂頭いて、

頭として口を噤んで居た。

八重子は又憶出したやうに、「丁度二月許お目に懸りませんでしたね。」

「忙しかつたものですから、遂御無沙汰を致しました。加之

貴女も大切なお体ですから、今迄の様に自由な御交際も出

来ない譯なのでございます」

其の聲が、ふと耳に入つたのか、擦違さまに兩人の姿を睨め

る女があつた。八重子も願背いて見反すと、女は靜に小暗い

方へ身を寄せながら、「健三様だ！彼の聲は、健三様に異ならぬ。お同伴は八重子

様とかいふ何時か見懸けた人……、では矢張妾は欺されて居たのだ。」

其はお今であつた。お今は何故に斯の邊を徘徊して居るのであらう。

健三は夢にも其と知らぬ様子であつた。

四十二

お今は青天の霹靂にも似た健三の仕打に、一切の望を打碎かれて、一度は死なうと思ひ一度は故里へ歸らうと思つた。渠女は一旦恚と思決めた事の、圖らずも齟齬して、身は限な

き恥辱に汚されて了つたのである。
 お今は健三が室を出去つた後は、奈何に斯の身を處すべきか
 を案じ煩うて、今はなかく人に世をも頼む事の當であ
 る事を語つた。日がぼつたり暮れはてた頃の事であつた。亂
 れたる髪を撫着け、荷物のうちに要あるものを一つ包に纏め
 ながら、燈火を挑げて、盞のうちに取寄せて置いた硯と紙とを
 取出して、二通の手紙を認め了つて、床の上に置いた。頼四
 郎に見つけられては、引止められる事もあらんかど、縁から
 庭に下立ち、ぐるりと庭を一廻して、例の切戸を押開け、暗
 に紛れて門まで出て了つた。
 吻と一息して、門前に臨んだ頼四郎が階上の室を仰げば、一
 枚を餘した雨戸の隙から、燈の影窓外を照らして、餘光扉際
 の葉櫻の梢に透つた。室の主人は未だ寝ねぬのでもあらう、

六六

一時咳拂の聲が聞かれて後は、洋書の頁を翻へすやうな音の
 大氣の溜りたればか、微に聞けた。耳門の鎖を引いては、奈
 何に其の人を驚かすであらうかど、少時躊躇つて居た、纏て
 大なる嘆息の洩れ來るに吃驚して、お今は悸と身を練めた。
 注意に注意して耳門を押すと、するくど靜に啓いて、氣遣
 つた程音も無かつたので、急いで門を出て了ふと、急に心細
 さの増しては來るが、また何んぞなく胸が晴々しくなつたや
 うにも覺れた。
 兎もあれ、と謂ふので停車場へ急いで、瀟車に乗つて東京
 へ着いて、煩惱く附纏ふ車夫等が呼聲を耳にも懸けず、廣小
 路を横截つて、何處といふ的も無くぶらくと歩を進めた。
 而して兎ある横町を曲つて、五六門も行つたかと思ふと、は
 しなくも健三が八重子と押駢んで行くのに邂逅したのであつ

六七

た。

お今は、むらくとして燃上がる願患の炎、一度は後を追つて、兩人並べて置いて健三が薄情を詰り、思ふ存分赤恥掻して與れやうか？、とも思つたが、否、待て！、自分には既に健三を思切つて王子の家を逃出した身であつて見れば、其も要なきこと、一片の手紙に欺されて遙々上京した自分こそ世に假令の無い魯者ではあるまいか。と、思復して、薄暗い横町を、とぼくと辿り出した。

「はッ、口惜しいッ。八重子さんといふ立派な方がありながら、何んだつて妾を呼寄せたのだらう。人を欺かるにも程がある！、然うさ、妾は健三様に欺されて東京まで赤恥晒しに來たんだ、其に異ない、今となつては阿母様に面目ない、妾あまの、什麼氣で彼如も剛情を張つたのかしら、と

謂つても今更爲方がないか。」

「どころで妾は何處へ行く氣なんだらう。何うする目算？、西も東も更に知らぬ土地を塵遣事して歩いて居て、其の間に夜が更けると、泊る家もなし……、あ、あッ、寧死なうか。」

決心したといふ譯では無かつたが、斯はか今の胸に幻の如くに映つた考であつた。

「國へ歸ると謂つても面目ないし、妾あ、妾あ、まあ何うすれば可いのだらう。」

其の手は何時か懐中へ差入れられて、其の面は深く襟に埋もれて居た。

何處を何う歩いたか、宛然夢心地で居ると、突然
「やっ、嬢様何うなすつた？」

と、錆のある太い聲で呼止めたものがあつた。
さて不意に、斯の帝都殿しと雖も我を知つたものゝ無い筈に
と、咄嗟の間、お今は内心に異様の感を越しながら、面を盛
げて、と其の人の姿を見て、
「ヤッ、貴方は……。」
と、吃驚すると、

「櫻山ですよ。」
夜目にも其れ、戸毎の軒洋燈に明に見られた。渠は櫻山であ
つた。

四十三

「まあ、何うなすつたんでがす。今ッから何方へ在有つしや
るんで。お、室町の方へでがすか。では見當が違ひます
せ。」

「いゝね、然らうでございませんで。」

「では何方へ？」

「何方へと申しまして、別にも無いのでございます。」

「じやうだんぢやがあせんせ。的も無しに今時分歩いてる奴

もねねもんぢやがあせんか、何んでがすか、迷子におなん

なすつたんで。」

「其様譯でも無いのでございます。」

と、お今は何んもなく茫然して、言葉には至つて力が無かつ
た。

櫻山は例の如く、頬の邊には冷な笑を漂べて居た。

「其様譯でも無いんでがすと、はあてね、念体何うなすつたんでがすね、お國へお歸りなさらうてねんですか。」

「いゝね、……あの、然うでもございませんで。」

「解らねいな。」

「はい、自分にも解つて居りませんので、尙だ何んと身の振方を付けて可いのか。」

「王子の方は何うなすつたので。」

「逃げて参りました。」

と、應へる目算でも無く應へて了つた。

「逃げて……、ね。」

「はら。」

「ぢや今夜は何處にお泊んなさる？」

「何處と申しまして。」

「宿でも取つてありますから。」

「いゝね。」

「妙でがすな。貴女些いと何うかなすつちや在有しやらないか。」

「何有……、ね、其の。」

と、狼狽して、はつと我に返つて、

「少し考事がございますものですから。」

「成程！、何うも些いとばかり變態だと思ひましたよ。ところで斯う起つて居たつて爲様がねね。雨も降つて來さうだし、夜も更ける、何うでがす？、私の許へお在有なすつちや？、ね、而して落着いて緩りとお考なすつた方が可うがすよ。また及ぶだけ何んどか御相談に乗らうぢやありませんか。遠慮はしなさらねねが可い、つまらねね事つた。お

見受申したところ、何か大しか心配がお有んなさるやうだが、捨てる神あれば助ける神ありつてね、世の中は然う心配する程の事もねほもんでさ。さ、とろく出掛けませうか。」

七四

「はい。御親切は有難うございますが。」

「何んだ、尙だ遠慮かね。いや一酷な方ぢやあるゆゑか。御覽の通り私あさくばらんの能なし野郎だが、人様の難儀を見るも、何うにも放擲とく氣にはなれね。まあ、性質なんでがすね。家へ歸れたつて年寄が居るんぢやなし、斯う見れたつて尙だ獨身者なんでね。ですから氣の置ける奴なんざ、一匹だつて居ませんのさ。結局氣樂なもんでね、へッ、へッ、へッ。次第に依つちや、假令一日や二月逗留なすつたところで、格別面倒もありやしません。何有、つい近

所でがすよ、斯の先の横町を曲ると直でがす。」

と、引立てんばかりにして勝はるゝに、お今は強つて辭みも爲兼ねて逡巡して居る。と、ひやり頬を掠めて、やがては、ばらくと降り出す雨。向上げて、空は何時の間にか一面に掻曇つて居た。折りも折とて、降り出す雨に、お今は殆ど進退窮まつた心地がしられて、

「はッ。」

と、舌打した。

「まゝよ。」

とばかり腹を据ゑて、半分は自棄になつて、明日が日奈何なる難儀が懸らうと、また其の時は其時の思案。目前の危急はそれよ！先方の親切氣な言を渡りに舟と少時の雨宿。旅の恥は掻捨てよ！と決心して、

七五

「では御親切に甘なまして。」
「ひい、其が可がす。」
と、櫻山は莞爾して、
「大降りにならねえうちに、急ぎませう。」

四十四

健三と一場の言争をして、頼四郎は樓上の己が室に引籠つて
限なき憤怒に身を焦して居るうち、お今の室にも又々一騒動
の觸起つたのに、覺せず胸を轟かしたものと、今日より再び
お今を見ざるべしと決心して、獨業を煮やして居た矢先であ

つたので、知らぬ面して、深く事情を探らうとしなかつ
た。が、蟲が知らせたのか、夜は九時頃の事でもあつたらう
か、心狭き女の思に惱んでは、奈何なる凶事の湧き出んも圖
られず、密かに二階を下りて、お今が室の容子を窺ふと、
室内は寂として、燈火の影さへ漏れぬに、疾や寝に就いたの
でもあらうか。と、引返さうとする、襖の隙から椽先に眞
白さの微見ゆるは、將に落ちんとする月影の雲間より返る
のであつた。
頼四郎は忽ち胸を突かれて、襖を啓けて裡に入ると、室は奇
麗に取片付けられて塵さへ留めなかつた。さて遅かりしか？
斯迄氣早い女とも思はなかつたが、晝の間の兄の激しい言に
取詰めて、さてこそ家出したに極まつたり。と四下を詢しな
がら、床の上に置かれた二通の手紙を取上げて、自分に宛ら

れた一通をば急ぎ讀下すと、

「…………一度は故里に歸らんかとも申し候へども、今さら
 おめくど、歸る事もなり侍らず、おはせに從ひ其は思
 どゞまり申候。然りながら幾久しく御世話に相成り居り
 候へば、貴方様の御迷惑も、さこそ察し上げまゐらせ
 實に、心苦しき事に候へば、今はなか／＼に斷念め強
 く相成り申し、何事も妾が不運とあきらめ、残り惜しき
 お暇申上り。何處へ参りて宜しく候やらむ東西知らぬ
 頼無き身に候へば、何處へとも定め難なく、二度お目に
 懸る事も候まじと存じられ候。永々の御親切は胸に染み
 居り候まゝ、幾千代かけて忘れまじく候。頼み難き事を頼
 みどいたし、はる／＼と上京仕り、はしたなき身を御覽
 に入れ候が今更恥かしく候へ共是ども草深き田舎に育

ちたればの事に候へば、お笑下されどじく候……………」
 斯して居た事ではあつたが、頼四郎は今更のやうに仰天して
 「や、や、やつ。」
 ど、二通の手紙を引握んだまゝ、玄關へ駆け出て、下駄履く
 間も遅しとばかり、突と外面へ飛出して一散走り……………」

健三は八重子に絡はられて、お今と擦違つたのさへ知らずに
 暫しは其の邪氣の無い物に、お今のある事さへ忘れはて、
 心は二道に迷つて、われながら其の決斷に乏しいのを驚いた
 位であつた。口悪き國子の言に據つて、弟とお今との間に、
 何等か捉へ難き秘密の蔽包まれたるを信じて、計らず口角泡
 を飛ばして弟を詰れば、牙は全く己が邪推には過ぎで、二人

の心には塵ばかりの汚点も留めなかつた。愈々かきし思はし
たれど、勢の走る處我を驅つて、憐れなるお今をさへ罵り、
はては八重子をさへ訪れて、心は真に其に傾きしといふでも
無いに、暗中陰影を並べて、其の嬌語に耳を假せし不覺の淺
猿さ。

かくて八重子に別れて家に歸つた時は、頭腦は冷却して、
として我に返つた健三は、侮語の悪鬼に呵まれて、明日に
もならば王子に行つて、思に憫むお今を慰め、わが真心を打
明けんといふに考を定めて、枕について、とろりと睡むかと
すれば、
「兄様、大變だ大變だ。」
と、喚きながら、頼四郎は寢込に踏込んで來た。而して枕頭
へ彼の手紙を投出して、黙然として、きつかと坐つた。

「何んだね?」 喧しう。
と、晝の仕打の今更漸かしく、所故寢返り打つて冷然として
居た。

「手紙……、何さ、お今様の置手紙です。」

「何んだ?……、とッ。今の置手紙?」

と、勃然と起上つて面色を變へる。

「兄様、お今様は家出をされました!」

「はッ!」

四十五

健三は抛り出された手紙を取るより疾く、封押切つて讀下す

「……ながく御心配を相掛け申譯も無之候、然るお心と
存じ候はゞ、何事も此の身の不束なればと斷念めて、わ
ざく参り候て御内に波風もおこさせ申すやうなる事も
なし侍らざりしに、唯お手紙をのみ頼みにいたし候は、妾
が心の不覺とこそ存じ侍れ、漸しさいや勝り申し候、
されど一度誓ひたる心の誠は、今更破り申さんも女の道
として心苦しく候まゝ、是より何方へなりともまゐり一
生夫にはかしづき申すまじと思案を極め、たゞく
行末ともお今と申す憐なる女のありしとさへ折節に憶出
し玉はゞ此の上もなく悦しき事に御座候、再びお目もじ
申上ぐべき事の覺束なく存せられ候まゝ、筆の運も心の

まゝならず候へば委しき事も申上げ侍らず、口惜しき事
には候へ共お察し下さるべく候。

讀み行くうち、健三の面色は漸次に變つて、

「何んだ。こりや。全体出て行くのを誰も知らんといふ方が
無い。是では行先が全く不明瞭ぢやないか。」

「然うです不明瞭です。全く姿を隠して了つたんですから、
今更其様事を繰返す必要はないですね、また繰返したから
と謂つて後の祭だ、僕、豫め這慶場合が来るだらうと察し
とつたですよ。」

と、頼四郎は兄を呵責ひやうにして謂つた。

「察して居たばかりでは、今となつて鑑一文の價値もないぢ
やないか。」

「勿論です。するから僕が何とかして慰めて居やうと思ふ
と、……いやお蔭で汚らはしい疑を受けたですよ。而して
其の結果がお今様の出奔です。」

「何うも困つたな！ 何とか探し出す工夫が、……無いか
な。」

「恐らく有りますまい。」
「困つたな！ 斯様騒動が起らうとは思はなかつたよ。實
際。」

「爲方が無いですね。畢竟兄様がお今様に對する處置が酷に
過ぎたから、斯う非常な事になつて了つたのです。今更何
んとも取返しがつかんね。兄様は勿論此の罪を荷はんけれ
ばならんです。出奔したお今様には決して罪がない。寧ろ當
然の出来事です。僕をして、……ですね、お今様たらしむ
れば、可いですか。同然斯の手段を取つて自分を潔くしま

す。」

と、渠は議論的口吻を以て喋々と辨じる。

「廢せよ、今は理屈を謂つてる場合ではないぢやないか。」

「ですが、僕は飽までも兄様を責める！ 貴下は非い。第一
親御に對しても。」

「解つて居るッ！ 不要ん事は謂ふな。」

と、健三は苦痛に耐へ難き様子で、

「併し死ぬやうな事もあるまい。何しろ是非手を盡して探さ
んければならぬが、全体姉が氣が利かん。」

「氣が利くどころか、姉様は寧ろ今日ある事を望んで居つたの
でせう。」

「併しお前だつても氣が利かんぢやないか。」

「僕ですか。僕はもうお今様とは面を合さん事に決心して居

つたのですから、仕方が無いですよ。兄様は自分の非を棚
に上げるから怪しからん。」
斯の一場の騒動に、父も母も健三の室に集つて、殊に驚いた
のはお定であつた。平生餘り多く口を利かぬ父は、お今が二
通の手紙を見て、静に語出づるやうは、

「まあ、折角一人で上つて来たものを、餘り此方でとたを
ないか。折角一人で上つて来たものを、餘り此方でとたを
たして居たものだから、取越苦勞をして家出をしたと謂つ
たやうな譯なのだらう。此の手紙の様子で見ると、何か決
心をして居る様子だが、いや感心な量見では無いか、是位
量見の定つた女を、悪く謂つた國も悪いが、家内も悪い、
健三お前何うにか探し出して、今度の婚禮を取急ぐが可い
よ、其とも何處ぞ点の打込、ころでもあるのか。俺の考で見

六六

ると、八重子様などは到底較物にならぬらしいが、お定
お前何ういふ考だね。」

と、有繫は主人は主人だけの見識。夫の言にお定も前非を後
悔して、

「なか／＼胸の出来てる女らしいね。妾が見損つて居たのか
知れませんが。兎に角早急に、探せるだけ探す事と致しませ
う。」

「其が可い。」

と、主人は點頭いて居た。

頼四郎は垂頭いて更に物謂はず、健三は今となつてお今が一
家の同情を一身に集め得たのを内心に満足した。が、お今は果
して探し出し得べきか、斯は人々の心の底に潜む疑問であつ
た。

六七

四十六

健三頼四郎は闇ふに及ばず、磯川の一家は其から其へと手を
盡してお今の行方を探ねた。雖然更に其の手懸が無かつたの
で、健三は其の日の其の日の事務さへ取得ぬはどに屈託して、
時には物狂はしい絶望の聲さへ放つ事があつた。頼四郎はま
た自身に其處此處と奔走して、而して其の結果を健三に復命
した。健三の煩悶を見るにつけ、母親のお定は食事をへ碌々
進まぬばかりに心配して、或は取詰めた出来心から、新聞で
履見らるゝ淵河へ身を投げたのではあるまいかといふ憂慮さ
へ起した。其の意を保ち兼ねては、折には健三に漏らすと、

自由結

「た。」
ど、闇ふばかりで、歩々しく返事さへせず健三は情ない歎
聲を漏すばかりであつた。其の間最も熱心に奔走したのは頼
四郎で、最も平然として居たのは父親であつた。最も激しく
煩悶したのは健三で、最も鬱いで居たのは母親のお定であつ
た。
斯の騒動の間に、何時か一週間餘りは経つて了つて、漸く熱
くなり増る六月上旬の正午の頃、恁も出来事多き磯川の店頭
にイび一箇儼然とした紳士があつた。口齟こそ無けれ、黒の
山高帽子に糸魚子五つ紋の羽織、白つばい縞の袴に、茶博多
の帯、見たところ安値く踏んでも委任以上の官吏かとも思は
れた。年は三十五六でもあらうか。
ぎろりと店の隅から隅を見亘して、

「主人は在宅ですか。些と面談したい事があつて来たのぢやが、取次いで下さう。」
横柄な面構。如才の無い手代の一人、平蜘蛛なりに一禮して、

「主人は居りますが、誰方様で有在のしやいますか。」

「拙者か、ひ。」

と、點首いて、抛り出す名刺を見ると、

「春本勝之進」

手代は小首を傾むけて、奥へ行つて、少時すると立戻つて、

「何ひましたところ、主人は不快で居りますから、

何ぞ御用を仰付け下さいませなら、鳥渡手前まで。」

「否。」

と、反身になつて、

「拙者は買物に来たのでは無い。また取引の爲にでも無いのぢや。」

「へい、左様致しますと。」

「主人に直々に會ひたいのぢや。」

「奈何な御用向でございますか、鳥渡其の邊を……、何分不快で居りますから。」

「貴様に謂つても解らん。何か、主人は會はれぬといふのか。」

「左様な譯でもございせんが。」

「會はれぬと謂ふのなら其までぢやが、併し其は却つて其方の不利益といふものでは無からうか。」

「へい、へい。では同然何か御用を仰付けられますので。」

「解らん奴ぢやな。左様では無いと申して居るに、よるしは

會はんならば會はんで宜しいか、お前御苦勞ぢやが、も一

度取次いで呉れんか。」

「其はもう、お取次は致しませうが、御用向の次第を鳥渡有仰つて下さいませんと、其の何んでございさす……。」

「用向の次第か。」

「左様にございます。」

「其はな。」

と、渠は落着き拂つて、

「斯うぢや、磯川一家の名譽に關する事ぢや。疾く謂へば暖

簾に關はる事なんぢや。其に付いて一應主人の意を問に來

たんぢやが、……畢竟拙者が老婆心……、親切なんぢやが

其方で無にするを謂ふのなら、拙者は敢て強ひんよ。斯の

家には今混雜が起きて居るぢやらう、或者が居らんやうに

なつて、其なんぢや、其に付いて主人に會ひたいのぢや。」

「少時お待ち下さいまし。」

と、手代は慌忙奥へ行つて、再び出て來て、

「何卒お通り下さいまし。」

「然うか。」

と、紳士はつくと奥へ通つた。巧に姿を變へては居るが渠は

櫻山が化けて居たのであつた。其に証據は左の頬に、それよ

小豆大の黒丸子！

〔四十七〕

「私が主人です。」

「拙者は春本といふものぢやが。」
と、お互に初対面の挨拶が終ると、櫻山の春本は葉巻煙草に
火を点けて、緩に一吸、はつと吹き出して、

「ふっ。」

と、勿体ぶつて切り出す。

「お邪魔を致したのは別儀でもないぢや、畢竟貴方ノ許の一
家に關した事なんぢや。む。」

「何か左様な事ださうで。」

と、落着いては居るが、手代の取打にてお今の事に關してな
らんと察した健三は、漫胸頭の響動を出して、覺ゆる片唾
が飲まれるのである。そも奈何なる消息を窺らしたのであら
う、凶か？、吉か？、と、思つて擬如と春本の面を噴つて居
ると、渠は見返して、冷な笑を含んで、

「貴方、酷い事をしなすつたぢやね。」

「いや、別に……、酷い事といふのでも無いですが。」

「貴方嘘を吐きよつては可かん。今といふ女を欺したぢやな
いか。いや其の今といふ女は儘に貴方の何んぢやらうな？」

「然うです、許嫁の女です。」

「よろしいッ！、儘に許嫁の女ぢやね。」

「では貴方、其の女を冷遇したのも實際ぢやらうね。」

健三は、はつと赤面して、

「冷遇といふ譯でもなかつたですが、少々一家に事情が纏綿
して居つたものですから、つい其の何んだつたのです。心
にも無い事を謂つたものですから、其で……、何處へか姿
を隠して了つたのですが、何んですか、萬一貴方の許にでも。」

「いや、然うぢやないんぢやね。拙者の許には居らんよ。」
 「貴方の許に居りませんと致すと。」
 「酷い事になつて了つたね。」
 「冷に傍を向く。底意ありげに。」

「はッ、酷いこと?。」

「左様。」

「今が何んとか致しましたか。」

ど、づツと體を乗り出す。思はしい考に、と胸を衝かれて、

健三は思はず面色を變へた。

「何んどしたかね、拙者は能く知らん。能くは知らんが、此方。」

ど、懷中を探つて、

「該品は覺があらう。」

ど、一束の手紙を抛り出した。見ると、其は健三がお今に送つた幾通かの手紙であつた。
 愈々不思議と健三は眉を擧めて、

「これは覺があるです。が貴方はこれを?.....」

「.....拾つたのです。」

「お拾ひなすつた?。」

「左様。」

ど、吃と健三の面を噴めた。

「何處で?、何處でお拾ひなさいました。」

「さ、其は些と申僧いぢやがね。」

「然う有仰いますと。」

ど、健三の手先は、わな／＼顔出した。

「爾はん譯に可かんから爾ふがね、併し吃驚なさるな、向處

ぢや。」

「は、向島と有仰いますか。」

「而も河の岸に落ちて居つたぢやね。側に尙だ風呂敷包が一つあつたのぢやが、……つい、忘れて持つて來んかつたよ。」

「然う致しますと。」

と、急込む唇の色は疾や變つて居た。

「左様、多分投身をなすつたのかと、思はれるんぢや。其の時の形勢で察しるど。」

「は、は、はッ。」

「お氣の毒の次第ぢやが、確に其に異ないんぢや！拾つたのは一昨日の晩の、左様さ、十時頃でもあつたかね。」

健三は、仰天して殆ど正氣を失はんばかりの氣振であつたが有繁に氣を取復したのか、

「ではもう、確に投身をしたものと見えます、實は私の方でも手を凝して探して居つたですが、……いや御親切は忘れんです、實に何うもお禮の致しやうも。」

「有何禮には及ばんです。」

「何分後から、……斯の場合でございますから、お察し下さいまして。では斯の手紙は頂戴致して置きます。」

と、取上げんとするを、じろりと見て春本は頬膨らした。

「おい、おい。慌けなさんなよ。」

と、がらりと變はる鋭き五音。

「何んでございますと。」

「欲しければ三千圓お出しなさ。ね、其でも安値いものなんだが、大負に負けて三千圓なら手を拍ちませう。」

四十八

春本の櫻山は、ますます毒舌を奮つて、
 「お氣の毒と謂へば謂つたやうなものだが、其だつて爲様が
 ねむぢやねむか。自体お前さんが非いんだ、女一人を殺し
 といて、何處で風が吹くと言つたやうな面構は、些と蟲が
 好過ぎやしませんか。實は其は新聞屋へ持込まうと思つた
 んだが其では折角賣り出した磯川といふ名前に紙が付きは
 しまいかと思つて、賣りに來たのは私の親切さ。惣と二三
 で何方も好かれと三千圓の無心に來ました、斯の構をして

世間で評判の麥酒會社の社長さんのお名前は、三千兩ぢや
 安値いもんでさ。何うですが？、お購なさいますか。」
 健三は眼を鋭にして、對手の顔を穴の明くはと疑視めて居て
 「貴様、強請に來たんだな。」
 「強請？、……強請とは何んだ、人間の悪い事を言つて與れ
 るねむ。」
 「強請で無くつて何んだ？、人の弱點へ附込んで……。」
 「黙れ、おいッ。お前さんは何んだ、いやさ磯川さんは人殺
 をなすつた。」
 ど、大聲になる。
 「こらッ。」
 ど、一喝すると、
 「な、何んだ。然うぢやねむか。お前さんは女を欺して、可

いかな、嫌気がさしたと聞つて、惘然に、女を酷目にして
 いや何様に酷目にしたか知らねわが、何しろ死んで了つた
 位だから、其の酷らしさが思遣られらあ。ふん、餘り利い
 た風の事を謂ひなさんなよ。かい、若旦那何うなすつた。」
 對手悪しと思つたのか。健三は默然として居た。
 「これさ、何んとか返事をしなさらねわか。購はれねわなら
 購はれねわで可いが、事件は立派な新聞種だよ。小石に、
 かねわやうに氣を付けなさらねわど、折角のお名前に傷が
 付きますよ。三千圓は大きなやうだが、お前さんの薄情で
 因業なのを世間に御披露するなんざあ。へん、餘り氣の利
 いた仕事ではありますまいせ。兎に角斯の手紙は私の金の
 蔓なんだから。」
 と、手紙を懐に入れかゝるを、健三は慌て、押し止めて、

「ま、お待なさる。」
 「お購ひなさるのけね。」
 「然う……、まづ篤と談合した上でね。」
 「何んだ、尙だ那樣羨切らねわ挨拶ですか。」
 「ま、静になさい、緩とお話する事に致しませう。」
 「然うですか……、なぞ、油断を喰はして、派出所へ訴へる
 の巡查の出張などは利益ぢやがあせんよ。私は強請るん
 ぢやねわ、品物を賣りに來てるんだよ、何も無理に購つて
 與んなさるなくつても可いのさ。加之警察へ出た段になる
 と、私の口から、べら／＼と事の顛末を饒舌つて了へば、
 大騒！。死骸の搜索やら何やら彼やらで。ね。大した事に
 なつて了ひませう。」
 「いや、君はなか／＼物知だ。」

と、健三も負けぬ氣の冷笑返して、

「お茶でも飲んなさい。今一應考へて見ます。」

「大層手間が取れますね、何しろ座り馴ね奴が、座つて居

るんだから耐らね奴、窮屈で遣り盡れね奴、御免なさいま

し。

と、どつかと胡座を組む。

「何うだね、千圓ばかりに負からんかね。」

「千圓ね。」

「然うさ。」

「旦那、悪直は申しませんよ。」

と、憎々しげに空欄く。

「負からんか。」

「勿論の事つてさ。往生際の悪い事を有仰いますな、ものは

額が反古紙同然の手紙だが、磯川商店麥酒會社の名譽が賣

物なんだ。」

「其は解つとる！が、だから此方でも屢く事情も糺さない

で、千圓進上しやうといふのだ。其の裏には何様いかさま

があるか知れたもんぢやないが。」

「成程！一應は道理だが、其はお断り申しませう。」

「甚く強い事を謂つてるが、其を假令新聞屋へ持込んだとこ

ろで、

「千圓では賣被りだが、折角の親切だから買つて置かうとい

ふのだ。」

「だつて餘り安値いぢやがせんか。せめて最う五百圓出しな

ん。」

「可厭だ。」

「可がす。」

と、ぼんど手を拍つて、

「根が資本なしだ、負とさせよう。」

× × × × × × × ×

少時経つてから、櫻山は數多の手代小僧の探奇な眼に見送られながら、磯川の店を立出た、懐中の紙幣を弄つて見ながら

「いや、うけに入つて了つたな。斯うして千兩招納といて、

國から籍を送らして、お今の女を女郎に賣飛ばして、また

若干かにする。何しろ面が好いから、六七百兩は大丈夫。

旨いな！」

と、獨語いて頬の頰れんばかりの笑面であつた。

四十九

激烈なる驚愕と、壁ふべからざる悲痛とに神経を觸めたので、もあらうか、健三は櫻山に強請られた其の日よりして、どつかど病の床に着いて了つた。其の次の日の夕景の事であつたが、斯ばかり心配多き磯川の店頭に、またく意外なる珍客が現はれた。其の人は車から下りると、縞の財布から幾箇かの白銅を取出して、汗を拭き居る車夫に手渡して、

「御苦勞でございました。」

と、田舎物の律義さは言は至つて町噺であつた。年は四十五か六でもあらうか、丈高からず低からず、身には結城紬の袷を着て黒絹子の細い帯を締めて、小さい丸髷の艶は尚しも褪せず、目鼻立ちきりりと締つて色白く、身装の野暮なのに較べて、人品は奈何にも立優つて見られた。

婦人は店中を粗々と噴しながら、慥て手代の一人に對つて、慥慥に腰を屈めながら。

「此方はあのう、磯川様と有仰いますので。私は田舎から参つたお今の母でございませうか。」

「左様で在有つしやいませうか、へえ、くそ。」

と、手代は他の手代と何やら耳打して、聽て奥へ駆け込んでまた引返して、

「さ、何卒此方へ。」

と、愛想好く奥へ請じ入れた。

思がけ無い珍客に訪られて、奥では如何に斯の不幸なる客を謂慰めんと評議は區々、お今の踪跡を晦ましたるさへ、既に落度は充分なるに、昨日の櫻山の口の端では何うやら投身したらん如き様子もあるに、斯くては尙更大事と、其々密々に實否の詮議最中の矢先なれば、何んと申譯して可い事か、差當つての當惑に、常は横柄ぶつた奥方お定の方も額に皺、胸に患、氣を鎮めんとか白湯ばかり飲みつけて、辛而其と思案の付いてか、まづ兎に角、出来るだけ町噺に待遇さではど奥まつた一室へ勝つて、接待の大役は罪はおのれ重ければお定が引受けられたは、有緊は男勝りの氣丈さよと、女中の蔭沙汰。

先づ道中の恙なかりしを悦ぶ挨拶など慥慥に慥慥を究めてお

定の待遇ぶりの町重さ。お絹は殊にお今の將來を托すべき家
 なればと、座にも堪へぬやうに恐入りて、只管にお今が到着
 以來蒙りたる親切の程を謝するに、有繋にお定は身に冷汗を
 流して、應對に窮すること幾度といふ事なく、兎まれ長途の
 旅に疲勞れ玉ひしならん、爰は人馬忙しければ眠り難かるべ
 し、此方へ来て打寛ぎて暫しは打臥玉へなど、枕取出して勸
 ひるに、渾身綿の如くになつて、吐く呼吸さへ紅塵に汚れた
 れど、斯くては禮を失はんど、辭退して、居住をさへ崩さぬ
 お絹の舉動に、お定はいよく胸藏かすばかりであつた。
 お絹は其と氣が付かず、
 「早速でございますが、あの——、這度は娘が参りまして、
 定めし何かと御面倒でございますましたらうに、行届きません
 ものでございますから萬事此方へお任せ申しますやうな

と、お今が申しますに任せて差上げましてでございますが、
 私の方でございまして何んの貴方、父さへ存生で居りま
 すれば、這處お耻しい事を致す譯では無かつたのでござい
 ますが、何分女許でございしますので、つい、其の何んでご
 ざいます。はい、娘は同然此方に居りますので。」
 と、問はれて、お定は今更はつと答に窮つて、
 「は S.....」
 と、覺す口を迂らして、
 「いゝな、あの.....、何んでございます、只今は。」
 「何方へか参つて居りますので。」
 「はい、奈何にも此方には居ませんのさ。」
 と、斷乎と謂放つて、お定は屹と胸を据ゑた。

「然う有仰いますと、何方に。」
と、お絹は氣遣はしげに訊ねた。
其の面を、暫と見て、莞爾して、

「お今様はあの何んでございます。此方は御覽の通り手狭で
はございますし、願々しくつて王子の方へお遣り申して置
きました。ふとする今日あたり熱海の方へ娘と一緒に
参つたか知れませんが。もし然う致しますと、何れ暫は逗留
といふ事になりませうから、ちよいとお逢ひなさる譯には

参りませんが、何んなら貴方が御出京なすつた事を申して
遣はしても宜しうございます。御覽りで宜しうございませ
うから、まお那して二十日餘り遣つてお置さなさいませ
誠にお氣の毒様でございませうが。」
と、お定は辯舌爽かに、真しやかに欺いた。
と、いふのは、到着早々不吉な噂を耳に入れなば、荐ねて奈
何なる珍事の湧上らんも知れずと、其の場だけの一寸脱後
日はまた其の時の思案として、追々に其と無く對手の感付か
んやうにせんどの早速の氣轉は馴れたもの。
お絹は不審の眉を寄せて、と、小首を傾けながら、
「王子に参つて居りますとございますか。あの王子と申しま
す。」
「娘の宅なのでございます。」

「其は何時頃からの事でございますので。」
「東京へお着になつて直にでございますか。が其が何んとか
致しましたか。」

と、胸は憚々する。

「はッ。」

と、有仰いますと。」

と、早口に。

「何うも合点が参りません。」

と、物辭に。

「其はまた、何様仔細なのでございます。」

「實は娘から手紙が参つて居ります。」

「は、は、はッ。」

と、お定は仰反らんばかりに仰天して、思はず面色を變へた

が、

「では此方の御様子、……あの御存知で在有つしやいます
ので。」

「い、い、何うも存じは致しませんが、娘から参つた手紙に
は、彼女は當分下谷の櫻山様とか有仰います方に居ります
さうで。」

「はッ櫻山？」

「はい、貴方様の御親類様で在有つしやるとかで、今度はま
た御厄介様な娘の親元になつて下さいますさうでございま
すが、今貴方の仰有いますお言では、何うやら話……。」
「御道理でございます。其には些と込入つた話があるので
ございますが、して其のお手紙は何時着きました。」
「四日ばかり前の事でございます。」

「お手紙の様子……。」

「籍を送れどの文面ではございませうが何うも臍に落ちません箇所も見せましたので、其で私が出京致しましたのでございませうが、櫻山様と申しますのは。」

「いふ、手前共の親類ではございません。」

「何ッ、何んと有仰ります。」

「多分其の底には企謀のある事でございませうが、何はさて置いてまづ、其のお手紙を鳥渡拜見致したいものでございませう。」

と、手紙を受取つて、肚の中でづらり讀下して、

「此のお手紙の様子は、何か健三との結婚上の都合で、櫻山といふものを假親にするから、至急籍を送つて與れどの事でございませうが、是は偽手紙でございませう。第一此の手紙でございませうが、是は偽手紙でございませう。」

はお今様の書風とは違つて居りますではございませんか。」

「やつ、其ではもしや。」

「お今様は家には居られません。はい、行方知れずになつて居ります。が、心配なさいませうな、お今様は儘に生きてお在有です、死にはなさいません。」

折から間の襖をさつと押啓いて現はれたのは、愛に裏れて蒼い面の健三であつた。

五十一

「伯母さんお壯者で。」

と、健三は往昔に變らぬ調子で軽く出て、
「久しく逢ひませんかつたね。」
お絹は娘の身の上の憂慮さへ打忘れて、凝如と健三に見惚れて居たが、

「まあ健三様でございましたか、私は誰方かと存じまして、眞箇に見違へて了つたのでございます。大層立派にお成んなさいましたこと。」

「相變らず樹白ですよ。時に伯母さん、實に申譯の無い次第ですが、今度はまたこんな事が出来上つて居るんで、實に何んですよ。お氣の毒な譯です。が、心配な事は何もありません。遠からず行方を知れるでせう。何有其程の事………逃出す程の事も無かつたんですが、お今様が彼の氣象でせう。處へ家に些とばかり事情があつたものだから、婚禮が

延々になつて居た矢先に、少しばかり私と感情の衝突がありました。すると其の晩置手紙をして逃出して了つたんですよ。此方の家だと其様事も無かつたのでせうが、王子の姉の方へ違つて置いたものだから、大騒動が起きて了つたやうな譯なんですね、併しもう家の方の相談も悉皆纏つて了つたし、お今の行方が解り次第結婚する運になつて居るのです。若し無事にさへ居て與れば、逃出したのが却つて幸だつたのですよ。といふのは……。」

と、彼はお今が無事らしき様子のあるに悦し之餘りて、大に元氣付いて咄嗟一家の事情を打明けんとするに、母は慌て、制へて、
「これ！、健三や、何んだねお前は。」
と、眼で知らすと、健三は微笑して、

「何有關係はんよ。」

「關はないではありません。其の櫻山といふ奴と春木といふ

奴と同じ奴らしいが、お前昨日の受取を持ってお在有なら

鳥渡此の手紙と較べて御覽……、何うだね。」

健三は一束の手紙を千圓に購つた受取と、お今の手紙とを較

べて見て、

「いや大丈夫！、生きてる生きてる！」

と、絶叫した。

「同じかね。」

と、母が覗くと、

「同じとも！。畜生奴、一杯喰はされたな。」

「はうら御覽なさい！。だから妾が然う謂つたのぢやないか

ね、篤と調べて見た上にお爲つてさ。詐欺だか何んだか正

体も知れない奴に、其様に急いで與る事は無かつたんだわ

ね。」

「でも阿母さん、新聞に、と謂つたから私も驚いたのさ。先

方の悪黨なのは初から見取つたが、悪黨だけに眞箇に出

された日には大事だと思つてね與れて遣つたのさ。萬一も

出されく御覽磯川の財産は半分無くなつて了ふよ。其に此

の上も無い不名番ぢやないか。何しろ可いやね、お今の行

方さへ解れば五千や一萬の金は惜しくも無いぢやないか。」

「其は然うさね。」

と今度はお相に向つて、

「何有ね伯母さん、昨日變な奴が私がお今に遣つた手紙の古

いのを持つて来て、是は隅田川の川岸で拾つたが、當人は

多分投身したんだらうつてね威嚇して、斯の手紙を買つて
 與れるといふ譯なんぞね、私は八方へ人を出してお今の行
 方を探して居つたに、更に譯らんところだつたから、或は
 然うかとも思つて、報知せられたお禮に、些とばかりの金を與
 つたのです。今になつて見ると、馬鹿げた事なんだが。」
 と、有聲に心の底に潜んだ汚ない考まで吐き出し兼ねて、
 先づ其の場を測して了つた。
 「兎に角斯の下谷徒士町へ人を遣つて、様子を探らして見や
 う、善は急げだ、早いが可い。」
 と、健三は勇み立つに、
 「其が可いね。」
 と、母親も同意して、例の松蔵と他に心利いた一名に委細を
 合めて、徒士町へと走らした。

尚健三は種々ど一家の事情など打明けて、巧にお相を慰むる
 に、お相は胸の痞の一時に收まつた思のせられて、涙含んだ
 眼に謂知れぬ感謝の色が見られた。
 主人の父親さへ應ては座に加はつて、一家は稍賑はしくなる
 最中へ、徒士町へ走らした使の一人、悄悄として立戻つて、
 「大變でございます。其の家には最う貸家札が張つてありま
 したので、近所で聞合はしますと、成程櫻山といふ者が住
 まつて居たに異ないが、昨夜夜脱同様にして何處へか行つ
 て了つたさうでございます。行先は固より知れませんが、
 何んでも十日ばかり前から、若い美しい女の姿が見れたとい
 ふ事でございます。松蔵殿は尙委しく様子を探つて來ると
 謂つて後に残りましたが、手前だけ鳥渡お知らせ申しに歸
 つて参りました。」

人々は二度吃驚。中にもお絹はわつと泣き俯して了つた。家内は再火の消いたらんやうに寂然した。

五十二

農商務省の大廈の中から、今しも出て来る二人の男がある。一人は丈高く瘦せた方で、重目羽二重の一重羽織にチルの一重茶芋の袴を着けて、較汚れたハナマの帽子を眉深に冠つて小脇に荒目皮のポイトンオリナテ擁へた淺黒の三十許の男であつた、今一人は背は較低い方で、豊腹と肥つて、薄地霜降の格子羅紗の上着、黒地白勝の縞羅紗の窄袴の洋服出立、帽

子は麥藁のひねつたものを戴いて、露西亞皮の編上げは眞白に砂に塗れて居た。金縁の眼鏡の下に其の大きな眼に凄さに過ぎるばかりに光つて居るが、色白で下膨した口元に愛嬌あ

る面立であつた。對話に勝手悪しとか、丈低き方は洋傘を小脇に挟んで、押並

びながら夕日さす路を急ぎ行く。「何うしたね、其で先方の令嬢は好意を表して居るのかね。」

と、丈の高い方が低いのを嗽下した。「其がね何うも僕にも解らんのだ、國代様の謂つてゐるには何

しる一應妻君とも相談して見ると謂つて居たがね、今に何んぞ返事の無い處を見ると、何うも御縁が無いから心細いぢやないか、何んとか君の辯舌で以て一つ周旋してくれ玉へな。行かんかね、先は何しる非常に氣位の高い令

「嫌だといふ事なんだから。」

「否、ね、今時の氣位の高いのはおてになつたものぢやない

が、む、う、其は周旋して見無いとも限らんさ。併し淡島

君、八重子さんにばかり無中になつて居ないで、僕の方の

話にも傾き玉へ。」

「君の方の話といふと。」

「例の嬢さん下女の事さ。」

「嬢様下女は可かつたね、其は何、物に依つては傾かん事も

無いけれど、何しろ下女ではね、降服さ。」

「眼鏡を氣にして手で制へる。」

「下女と謂つちや悪いけれど、實は所故づきの女で、以前は

身分のある女ださうだ。」

「以前は何うでも、現在下女では爲様がないぢやないか。」

「甚く現金だね。所謂時代の精神なるものか。」

「冷評すのは廢して與れ！、然ういふ譯でも無いのよ。」

「ではまあ、鳥渡おたつて見玉へな。能くは聞か無かつたが

ね、何んなら詳しく調べてお聞に達するといふ事にするが

斯の五月頃に東京へ出て、其から其の短時間の間に種々な

辛酸を嘗めて、己むを得ず奉公に住込んで居るんださうだ

が、實際だよ、美人だね。然うさは二十位かね、背は高

からす低からず、中肉中背で、色白で眼がぱつちりして居

て、鼻筋が通つて、口元が引締つて、些ども下女らしい風

もないね。其處が嬢さん下女の名ある所以なんだが。」

「成程成程！、其の上氣立が優しくつて嫉が好けりや申分な

しさ。」

「處が性質が見あげた程優れてゐるから不思議な位さ。何れ

薄命な身の上に違ないが君に一片の同情があつたらば、
つて與り玉へ。我輩悦んで親元とならう。」

「甚く肩を入れてる。ね。」

と、淡島は冷に、

「内々君が何んぢやないか。お古を持餘して……。」

「怪しからん！馬鹿を謂玉へ！」

「否、是は笑談さ。まづ笑談は扱として、真箇に國代の方の
盡力を願ひたいがね。」

「執念深い男だね。國代はまゝ國代さ。這麼廻出物を放擲と
く方はない。」

「併し其は處女ではあるまい。其の秘密にして居る仔細とい
ふのを聞かないうちは、甚麼失敗を演ずるかも知れないか
らね。名は。」

「お今といふのさ。實際のところ田舎育で、八重子様のやう
に濫皮の除れた處が無代に氣立は至つて優しい。最初の
望は夫婦暮の隠居の世話でもするか、何んでも堅氣の家と
いふので、三年許勤めて見たいといふ譯だつたのさ少し奇
しいのは戸外に出るのを非常に嫌つて居るけど、是ども
却つて性質が内氣な証據で、兎角臺所に座つて仕事を弄つ
て居る方が勝手らしい。」

「併し合ふうち何時か通へ出たので、
「僕は鐵道馬車さ。ぢや失敬するよ、何れ其の間に来て見玉
へな。屹度君が恍々して了ふから。」

「では土曜の晩あたりには本尊拜禮と出掛けやう。」

と、淡島は輕快な笑を残して、とある横町へ曲つて了つた。

五十三

淡島の同僚である黒田の家では、今しも妻君が浴湯を了つて
修飾はてた身に形付の意氣がつた浴衣を着て、縁側に立出で
初夏の庭の面を興ある事のやうに眺めて居た。如露を持つて
庭の盆栽などに水をうつつて居るのは、お今の身のはてゝあつ
た。

「お前もう可いよ。御苦勞だつたね、そして此處へ腰をかけ
てちつとお休みな。旦那様は今日は宴會があると有仰つた
なら、晩方になつたつて、那處に急しくもあるまいから。」

「はい、有難うございます。」

「それから何んならお湯に入つても可いよ。」

「いゝね、お後で戴く事に致しませう。」

「然うか、お前眞箇に氣立が優しくつて、妾は眞箇に安心
して居ますの。だけどお前、あの何んだつてね、奉公なん
かする身分ぢやないんだつてね。まあ什麼譯があつて零落
になつてお在有なんか知らないけれども、場合に依つては
お前の力になつて、行末の身の爲になるやうにして與げた
いつてね、旦那様ど何時も然う謂つて居ますの。」

「いゝね、もう、何時も種々ど有仰つて下さいまして、誠に
お禮の申し様もございませぬ、何うせ奉公に参つたのでと
ございますから、其の邊の事は御心配下さいませんで、同然
普通の奉公人のやうに、御遠慮なしに何んでも然う有仰つ

て下さいまし。然う致しませんが、却つて痛入りまして居

難うございますから。」

「何有ね、別に妾等が力になつて何うするといふ譯にも行か

ないだらうから、公然に世話なんて何事は到底出来まいけ

れど、それでもまた甚麽事があつて、人の力を假らないと

定つたものぢやないやね。ね、お前、然うぢやないか。」

「然うでございますとも、其はもう貴女……妾のやうな不

束者を種々と御親切に有仰つて下さいまして。」

「お廢しよ、那麽事は、それはね。女といふものは、自分

一人の力で何うするといふ譯にも行かないものだから、場

合に傍つては什麼富い家に生れをつて随分奉公をしまし

のでもありません。些ども耻かしい事はありやしない。慥

う謂つては何んだが、お前なんぞは自分の我儘で那樣體に

お成りでもないのだらうからそれは謂ふに謂はれない辛い
目にお逢ひだらうさ。阿母さんが繼母で家に風波が絶えな
いので、其で家出をお爲たとか何んとかね。そりや種々な
譯もありませうさ。有勝の事だわ。」

お今は伏目になつて、疾や涙にくれながら、

「左様でございます。」

「其代りまた女は廢りはないものだから、氣立さへ好けりや

随分出世も出来やうといふものだから、何も棄身になるに

は當らないやね。」

と、意味ありげに今の心を索引するやうな氣勢であつた。

急に小聲になつて、莞爾しながら、

「お前淡島様といふ方を知つてお在るか。」

「氣輕で面白い方ぢやないか。」

「左様でございますかね。」

「左様でございますか。おはよ。お前知つてお在有の筈ぢやないか。」

「其はお顔だけは……。」

「お顔だけはか……、まあ……、お惘然に。」

「お惘然とは、誰方がでございます。」

「お今はまあ、おはよ、お前まあ、空々しい事を謂つて。」

お今は耐力も無く畏入つて、さつと面を救めながら、

「どんでも無い事を有仰います。妾が何を……、奥様はお愚弄

遊ばすので。」

「誰が愚弄するものかね。お前那樣事を謂つて居ては、眞箇に

罪だよ。」

五十四

淡島は一度は國代の八重子嬢に滿身の血を湧かしての執心ではあつたが、屢々八重子の冷かなる姿態に逢つては、有繋に心を取變へて、全く望を絶てると同時に、同僚黒田の家に出入する事の繁くなつたといふのは、お今を一目見てより、奈何にしても棄難き念に引かされての事であつた。其の頃よりして黒田家夫婦が、お今に對する仕打は一變して恰も妻君俊子の妹の如く取扱はれるやうになつた。お今は愈厄難の身に落來れるやうな心地のせられて、安き念も無かつたが、今、夫と無く淡島の事をはのめかされて、漫

胸頭の騒々のものであつた。

「實は前から、お前に聞かうと思つて様子を見て居たんだが、奉公に出たのは家が居づらいからで、別に定つた縁があるもので無いとお謂ひだから、聞いて見るんだが、お前ももしか、好い方でお前を貰ひたいといふ方でもあつたら縁につく氣は無いかね。」

「はい、其は誠に結構でございます……。」
「餘り結構な方でも無いけどもね、其でも將來望のある方だから悪くは無いたらうと思つてね、其も妾等の方から申込んで、先方でお前を見込んで、是非！、是れは……。」
「はい、事なだから、お前行つて見る氣は無いの、餘り立入つた話で、實は何うかと思つたがね、先方で餘り乘氣なんだから、お前に鳥渡聞いて見たの。そりやもう、あの」

方から決して不足は無いたらうと思ふが、何うだね妾等に世話をさせる氣は無いの。」

「それは實に結構でございます、斯の上に那麼お世話までして戴きましたは……。」

「濟まないとお謂ひなかね。濟まないも何も要らないけどお前さへ承知してお與れだど、口を利いた効もあるといふものだから……先方の方といふのが、それらよくお出なさる淡島さんなの。御覽の通り誠に毒氣の無い好い方でもあるし、お役所では却々評判が好くつて在りやるから、お前も幸といふものだね。……それにお一人限で在りやるのだからお詔向だわ、お前は阿母さんが一人お有りだど謂ふから、其の事もお話して見たらね、それは老母一人位のことなら、却つて家の締もつく事だから、引取る分には差

支が無いと有仰るし、這麼恰好の縁談といふものはあるも
んぢやないよ。」

「はい、有難うございますけ、それでは餘り恐入つて、御
返事の申上げやうもございませぬ。……御覽の通り這麼不
束な田舎ものでございませぬから、何うもお受け申す譯には
参りませぬのでございます。」

「だから先方で是非與れると有仰るのぢやないか。お前に都
合があるのなら兎も角、然もなけりや行つてあげては何う
だね、功德にもなる事だから。」

「あら、奥様のお人の悪い。」

と、お今は覺えず微笑んだが、忽ちまた憂の雲一重眉目の邊
に現はれた。

奥様は可笑しく眞面目に、

「あれ笑事ぢやないよ。奥島だよ。淡島さんは何のくらの
前を好いて在有しやるか知れやしないの。それがお前破談
にでもなつて御覽、彼の方は什麼にお力落になるか知れや
しないわ、何うだね、行つてあげては。」

「でもございませうけど、釣合はぬは何んだとか申しますか
ら、幾、御親切に有仰つて下さいませしても、餘り鐵面しい
やうでございますから……。」

「然うお前、自分ではかり卑下して居ては爲様がないわ。折
角お前前方では彼のくらのに有仰るものを、然う一階には
ねつけて了ふのも何んぢやないか、女冥利が盛さるといふ
ものぢやないか。」

と、手厳しく責付けられて、心弱いか今は今更何んと辭ま
術も知らず、たゞ慄々逡巡するばかりであつた。

詰らるゝが苦しさに、出来得るだけ秘め置かんと臍の緒を固
め居たりし秘密をも、お今は悉く俊子の前に打ち明けて了つ
た。
お今は磯川家の紛紜に一時は心惑ひて、女心の深くも行末の
事なぞ考ふる逸もあらず、一夜王子の三橋の家を脱け出して
廣小路の辻に徘徊ひし折しも、圖らず若やと疑ひし疑の事實
となりて眼前に現はれしに、心奇しくも狂ひて生れて此來始
めて嫉妬といふものゝ味をいたゝかに嘗めさせられた。餘り
の事と口惜しくもあり腹立しくもあり、また嫉しくもあり、

悲しくもあり、思窮めては前後不覺、炎上る臍患のはむらに
煽られて、一度は引返して室町の本宅へと荒込まんどまで狂
立ちしものゝ、固より心弱き性質の、踏切つて其の實行は思
も寄らず、はては失心したらんやうに、何處どの處もなく歩
く間、ふと邂逅したは櫻山といふ魔性の怪物、此奴始めは甘
き油を沃けし口車に乗せて、空々しい親切をか、うかど乗
つたがお今の世馴れねばの事であつたが、さて誘はるゝまゝ
に其の宅へ伴はれて、三日四日と過す間に、合点の行かぬ節
のみ多く眼に付くばかりか、出入する者の人相の氣味悪さ。
折には主人の櫻山嫌味な真似して戯むるゝさへ居堪らぬに、
或夜の寢覺にふと耳に入りしは、櫻山が誰やらと我身の上
付きての密々話。怪しと心付きて或は母様の仰有られし魔の
者どやらで無いかど、思ふ矢先なれば怖々耳を聳つれば、何

うやら話は我が身を濁水の中へ抛り込んで金にせんと企謀の底らしい話の模様であつた。さてこそ！ いや／＼其よと飛起さんとは思ひしなれど、いや／＼今願立つては毛を吹いて疵の壁、反つて身の爲ならずと狸寝入して恐ろしさを忍んだ切なさといふものは。

斯くて其の次の日、櫻山が何處へか立去りし隙を覗つて、辛うじて蛇の口を脱れて吻と一息。其からまた身の落着を種々考へし揚句、今となつて國へは歸れず、然ればとて王子の三橋へは尙のこと、其の夜は旅籠屋に終夜寝ず明して、翌くれば早朝口入宿を探ねて、其家にも二夜ばかり明して、法外の飯料と身元引受賃を食られて、漸々と初奉公の目見得せしは即黒田の家であつたが、後で氣が付いて荷物を調へると、何處にて扱かれしものか、健三より我に送つた手紙といふ手

紙は悉く紛失してあつた。訝かしと一時は氣に懸けては居たものゝ、其の間に忘れて了つて、お今は何處でか取落したものと思つて居たのであつた。

始終を聞いて了つて、俊子は幾度か怪訝な眼を發て、かくては未だ其の磯川とやらんいへる方とは手の切れたるにもあらねば、一時は紛紜のありしにもせよ何時奈何なる風の吹廻つて、纏て芽出度き終結を見んも知れぬものを、更にお今が身上に立入つて、縁談を強ひんも心なき業なれど、

「まお那樣所故があるのかね。些ども知らなかつたものだから、お前の身の爲にと思つて勧めたんだから、悪く思つてお與れでない。では其の様子を旦那様にもお話して、淡島さんの方は断りませう。」

「何うか然う願ひます。」

と、應へてさし垂頭く心の底には、あはれ優しい心の籠つて居た。今頃は磯川の家では奈何なる騒の惹起つて居るであらう。頼四郎にも謀つて兎も角一度國へ歸つてこそ穩な仕方であつたらうに、つらわてがましき世に耻しき大膽なる仕打に衆を惱ましたる事の魯鈍しさよ。と、漫悔悟の念に呵責まれ、猶未練は健三に残つて、或は斯の結婚の成就する事もあらんかど果敢なき空頼して居るのであつた。あはれ失望して冷返つたお今が胸は今も一道の光に幽に照らされて居るのであつた。

一五十六

其の次の日黒田は、築地の高等下宿なる淡島の室を訪づれてお今の答を傳へやうとした。折から淡島は晚餐中で、一酌を傾けて後陶然として微酔の状であつた。黒田が入つて來る姿を見て、

「やあ、恰度好いところ」

遽かに手を打鳴らして、酒を命じなすれば、黒田は苦笑して、

「いや、餘り御馳走される方で來たんでは無いよ。放擲つていて與れ玉へ。」

「まあ可いちやないか。其とも何か面白からん事でもあるのかね。月下氷人だから、放擲つとけないぢやないか。」

「否餘り月下氷人など言つて貰ひますま。」

「何故と謂つて。」
と、氣の毒げに淡島の面を見ると、淡島はまた氣懸でならぬらしく、

「何うしたんかね。」
と、眞率になつて居る。

「は、然う出られては閉口する。」

「いや何んだか變だね。」

「眞箇變なのさ。」

「いよく以つて、容易ならん形勢だね。」

「其の通りさ。」

「いや何んだか心掛りなことになつて来たやうだせ。吉報を齎らして来て與れた譯ぢやないのかね。併しまあ一つ……可いぢやないか飲り玉へな。吉にしる凶にしる少時でも蓋

を開けないうちが樂さ。」

「ところが吉ならば思はせふりも面白いが、……實にお氣の毒な譯さね。」

「吉報ぢやないのかね。いよく！」

「まあ然うさ。吉報どころか吾輩大に君に謝せんければならんのだ。眞箇面目を失つて了つたよ。君に會はす面もない次第だけれど其の邊は偏に我が輩の苦心に面じて勘辨して與れ玉へ。」

「勘辨しろの、會はする面が無いの、と、變に敗まつて、一體まあ何うしたのだね。譯を謂ひ玉へ、譯を！」

と、黒田はぐつと一口に猪口を飲干して、
「何んだか何うも謂難くつてね。」

「何が謂難い事があるもんか。君と僕との間に城壁を設ける要はないよ。」

「ぢやあ謂ふが、例のね……、お今の縁談は不調和になつたよ。」

「何？、何うして、彼は君が當初僕に勧めた癖に。」

「其だから實に謂難いのだ。」

「だつて今更其様事を謂つては爲様がないぢやないか。お今に遺傳病でもあるといふのかね。」

「然うぢやないよ。」

「然うでなければ……、はてね其ぢや情夫でもあるのか。」

「其様淫行な女ぢやないがね。」

「では何か、僕が御意に召さんと謂ふのか。其で君が那樣に謂難いのだらう。何んの事だ馬鹿々々し。」

「否、那樣に癖んだものでは無いよ。」

「それはね、何うせ僕なんざ、何處へ行つても好かれな方さ、だから君に一臂の力を假りたのだ。」

「其がね、お氣の毒さ。假られ効も無くつて。難しい事を謂つて慍つて了つては困るがね、彼女は嫁入の出來ない譯があるさうだよ。」

「それはね、辭わるには何んども謂へるさ。」

「實際彼女には既に夫が決つて居るんださうだ。」

「夫……、夫持をまた、君は何んだつて僕に勧めたんだ。」

「怪しからんね。」

「其がね、僕些ども知らんかつたのだよ。昨日初めて君との縁談を持出して解つた譯なのだ。だから那樣駄々を捏ねすと、一通仔細を開き玉へ、随分憫然な身の上なんだから。」

「是は近頃迷惑だね。」

「迷惑だつて、君も一度熱くなつた女ぢやないか、一滴の涙位は當然のお禮だ。」

「馬鹿な事をッ、……併し夫の名前は何んといふね。」

「確か磯川とか謂つたつけ。」

「何ッ、磯川？」

「君心當りがあるのか。」

「ひょ。何有鳥渡。して夫ある身が何うして奉公なんぞに出

たのだ。確か磯川と謂へば麥酒會社の持主な筈だ。」

「然うさ。」

「可笑しいね、何んだつて奉公に出たのかね。」

「其處さ。其處に憫れな話があるのだ。君も實際彼女を愛し

とるのなら、大に奮つて彼女を元の身分に立歸るやうに盡

力するが可いね。」

黒田は此に至つてお今が身の上を語つたのであつた。

五十七

磯川の家では公になし兼ねたお今が踪跡を探らんとて、或は探明局に托し、手代の下々に至るまで心を砕いて、手が入り
を求めしかど、曾て行方は知れなかつたのである。お今の母
親のお絹は、若や娘の淵河にでも身を投げしにやあらん、或
は悪漢の術に乗つて、淺積しい境に身を落とせしにやあらん
と、夜もをちく眠らぬ心配に、磯川の一族はいよく心安

な。」

「ひよ。あるよ。」

「其の方なのです。」

「は。其が何うしました。」

「外でも無いですが、其の磯川さんに近頃何んか悶着があり

は致しませんか。」

「其を何うして御存知ですか。實は其の家出をしたものがある

ぢやね。其で紛紜して居るぢやよ。」

「其は確かお今さんと謂ひませうが。」

「はてね、能く御存知ですか、では賣下もしか、お今と◎ふ

婦人の居所を知つてお在有では無いかね。」

淡島は言を儉約にしてお今の身の上を話しながら、

「誠に氣立の優しい見あげた婦人であるですが、何うして那

様紛紜を惹起したのですか。其ともお今さんに何か瑕瑾
でもあるのでですか、何うか丸く治まると可うございませが
ね。」

「それは眞箇ですか。いや實際の話なんぢやね。實際とする
と、早速ですが黒田に相談して、一つ話を纏めたいぢやが
ね。」

と、其より萬事打合せなどあつて、此日は珍らしくも八重子
は折々座敷に侍りて、茶菓を侷めなごして居たが、聽て時分
時なればと謂つて、夕餉を饗し、酒を侷めた。

「今日は八重がお酌を致しますさうですから、是非お過しな
すつて下さいまし、それからつかんお話でございませが、
向刻のお話のお今さんと有仰る方は甚麼方でございませ。」
「まあ、其は田舎くさい点も見ゆるやうですけれど、無致は

聖夫

申分は無いですね。其に性質が至つて内気で……、何様風だと仰有るんですか、左様さ、中肉中背といふのでございませうな、色の白い、眼の清しい、下膨の面立ですな。

「は。然うでございますか。では同然彼の方が然うなんだよねね、お八重。」

「然うでせうよ、何んだか御様子が大層變でございましたもの。」

と、八重子は何氣無い体で謂つた。淡島は、「何んですか、其のお今さんいふのを御存知なので。」

其の時主人は口を噤れて、「松源で逢つたといふのかの。」

「はい。其から廣小……。」
と、謂かゝつて、八重子はふつと口を噤んで了つた

「其から何うした。」

と、父は意地悪さうに訊ねた。「何處かで彼の方らしい方を見掛けましたよ。何處でござい

ましたか。」
と考へる真似をして、其に紛らして了つた。父は快げに、

「何にしても行先が知れて是程目出度い事は無い。磯川の満

足が思遣られるよ。……誰か使を遣つて疾く知らして與ら

う。手紙……いやまだるい。電報！……いや面倒だ。其

れ！車夫を呼べ。」

x
x
x
+
x
+
x
x
x

「お今やお今や。」

ど、呼ぶ聲のするに、何事であらうかと、お今は珍客ある座敷の閑居際に手を支へて、

「何んぞ御用でございますか。」

ど、優かに伺へば、一座の視線は一齊に此方に集れるが中に炯々たる國代老人の眼は殊に氣味悪く思はれた。

俊子は微笑みながら、

「うつと此方へお出なさい、遠慮するには及ばないよ、其處では遠くにお話が爲難いから。」

ど、謂つて、さて國代老人に向つて、

「あのう是がお今さんと有仰るのでございますよ。其から今、

から辭を改めますがね、お今さんは是が國代さんと有仰るの

能つくね、お禮を申上げなすつたが可うございます、今度

是非貴女を磯川様の方へ引戻すやうにつてね、御盡力なす

つた方なのですから、そして最う、お支度をなすつたが可

うございます。いよく話が纏つたさうでございますから

「妾の方には關はずお歸りなすつたが可うございます。何し

ろお芽出度い事とございましたのね。

お今は唯茫然として、人々の面を瞞めて居たが、纏て耻しげ

に愁然と垂頭して了つた。

國代老人は例の快活な大聲で、

「はあ、始めてお目に懸るんぢやが、お今さんといふのは貴

女の事かね、私は國代といふもんぢやが、以後は別惡にし
 て貰はんければならんぢやよ、むよ。」
 「はい、もうお禮の申し上げやうもございませぬ。」
 「何有、厄介はお互にされもし、爲もするもんぢや、併し今
 回は實に飛んだ事ぢやつたね、定めし辛い目にもお逢ひぢ
 やつたらう。が磯川の方は最う、甚座事があらうと、本人
 を捜出して改めて立派に結婚させるやうにと一家の相談が
 決つて、至て準備も調つたる次第ぢやから、此の處は素直
 に歸んなさつた方が可いかと思ふんぢやが、加之國の方は
 らは阿母さんが上京して居るさうぢやから、是程好都合は
 無いぢや。此の家へは改めて磯川の方から挨拶があらうか
 ら、心配せんでね、さ、早速支度に懸んなさす。」
 豫て噂に聞いた國代老人が花も實もある親切の淡島より、話

吳十

には斯の老人が大なる盛力に依つて、自分は再び健三に面
 會はされるばかりか、結婚さへ故障も無く出来るやうになつ
 たどの事である。而して嫉ましく思つて居た八重子は、老人
 の愛兒なる事さへ知つたのである。雖ては老人より磯川に通
 じて、老人自身に迎へに来べしとは、俊子と共に兼て期して居
 た事であるから、お今は厚く禮を謂つて、座を退つて、髪を
 取繕つて、着物を着換へて、再び立出でると、間も無く國代
 老人と共に黒田の家を辭して、門に待たせてあつた車に乗
 が早い、二臺の車は室町さして勢好く駆け出した。
 お今は恰も夢を見て居るやうな心地であつた。

x
 x
 x
 x
 x
 x
 x
 x
 x
 x

吳十一

其の日は黒田も淡島も招かれて座に連なつたが、以て黒田と磯川とは最も親密な間となつた。八重子は一度淡島を嫌つたが、心機一轉父の勸に從つて、學士に嫁がんと思ひなしたのであつた。お今が家出の噂の父の口から自分の取に入つた。頃の話であつた。お今が結婚の後聞も無く、合金の式を行つた。頼四郎は一家の風波の既に収まつたと見て、豫て期圖した海外殖拓の事業に手を着けんと、程なく横濱出帆の派船に搭じてニューギニアに趣いた。此の日頼四郎を見送らんと横濱埠頭に立つた人々の中で、最も痛切なる涙を以て離別の手巾を振つたのはお今であつた。執拗で意地悪で而して高慢で酷薄であつたお今とお國とは、結婚後は復健三お今が間に隙を挿さまうとは

せず、最も老實なる慈母となつて、愛姉となつて此の新夫婦に對した。無頼漢櫻山は、頼四郎がニューギニアに向つて出發した前後に、他の詐欺事件に依つて警視の二局へ護送され、た、どの噂を新聞の三面の面の十行ばかりの埋草となつた。驚喜限り無かつたのはお絹であつた。健三は結婚果て、二週日の後、此の敬虔なる新婦と、姑とを提へて、一度稚馴染のお今の故里を訪れた。兩人が初恋の然に出し川の邊の柳もまた丘の邊の森も依然として渠等を迎へた。お今は常に初めて東京に出て冷かに待遇された心細さを想返しては、何事をも忍びて契渝らざるべきを誓ひ、健三はまたお今が家出せし時の愛慮、櫻山に死にしと威嚇されし時の悲痛苦悶を想出せば、能く妻を愛すべき所以を學び得たといふ事で、磯川の麥酒製造所の今も人の知る繁榮は、全く斯の新夫婦の陸まじき間か

ら産れ出た餘光ではあるまいか？。

頁十四

自由結婚

(完結)

明治三十五年八月九日印刷
明治三十五年八月十三日發行

小説自由結婚
定價金四十錢

著作者 三島才二

大阪市南區末吉橋通り四丁目八十六番屋敷

發行者 大淵涉

大阪市南區鹽町通四丁目百五十一番邸

印刷者 礪波伊三郎

大阪市南區心齋橋北詰

發行所 駱々堂

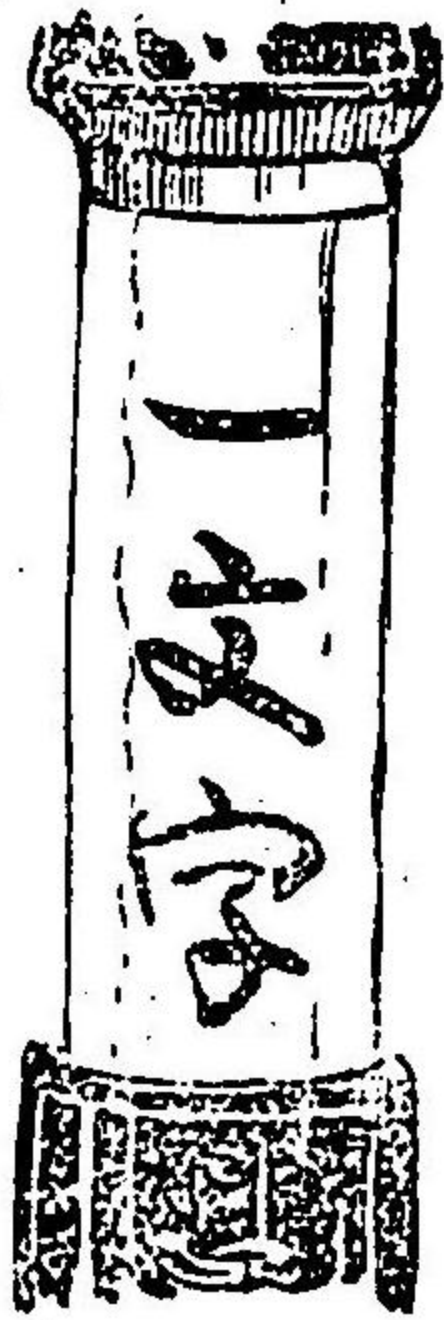
(電話東千〇七十一番)



伽羅善象



定價四拾錢
郵稅六錢



菊版
美裝
定價四拾錢
郵稅六錢

村上原六著



定價四拾錢
郵稅六錢



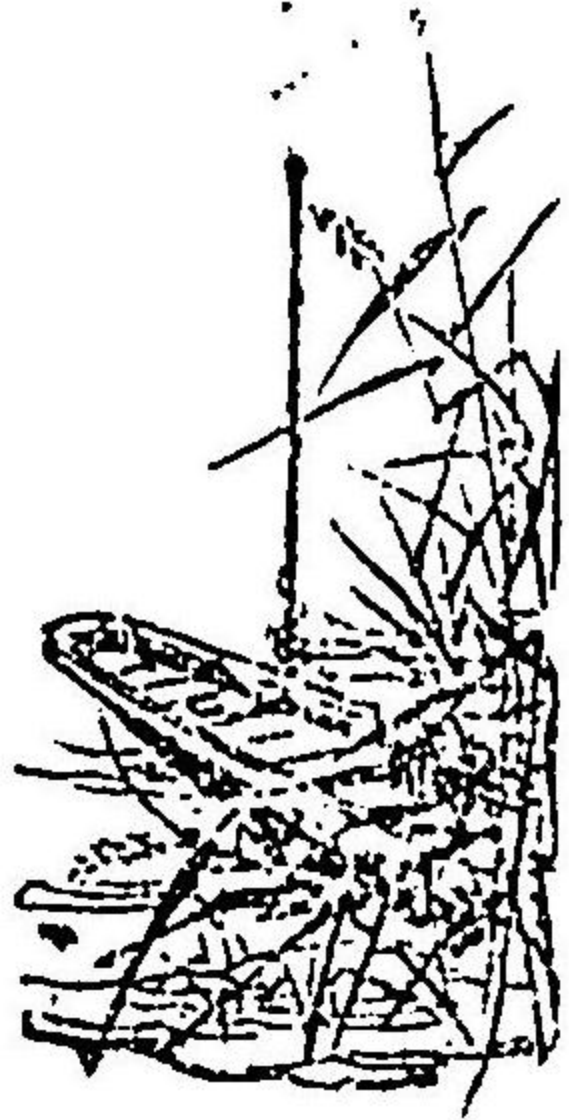
郵稅
六錢

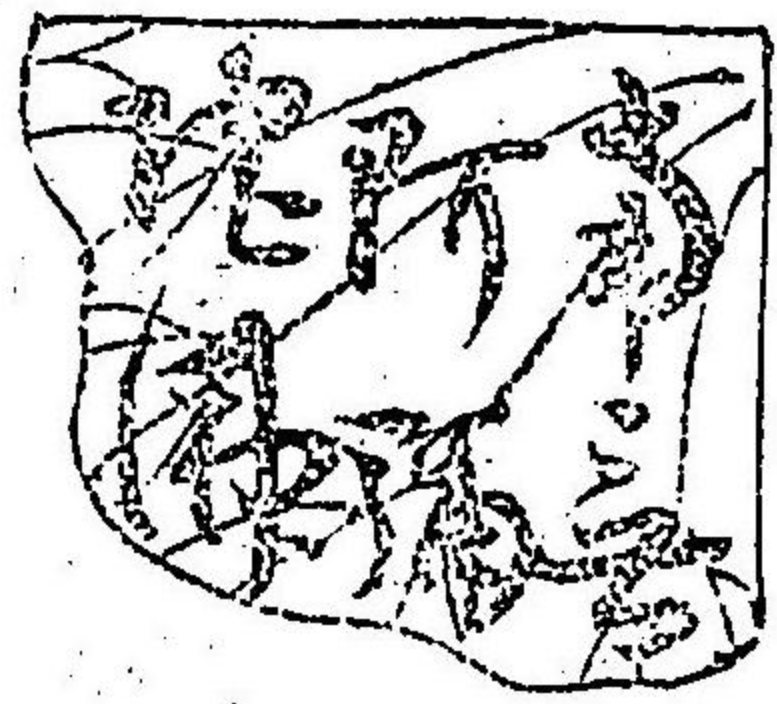
定價四拾錢



郵稅
六錢

定價四拾錢



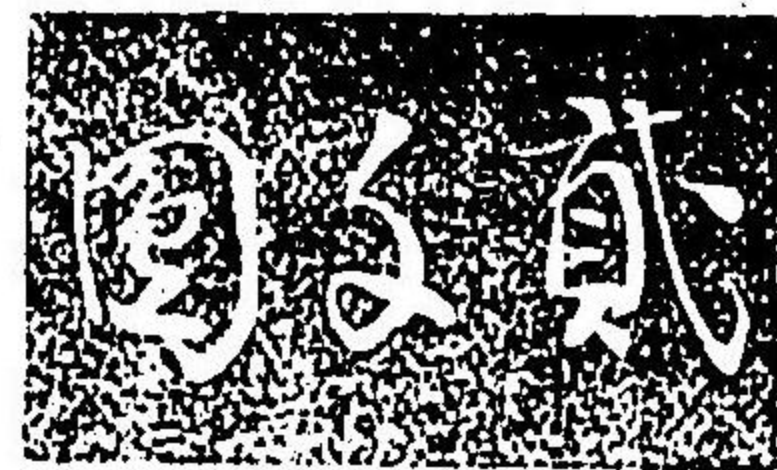


定價 貳拾錢
郵稅 貳錢

源氏物語



定價壹冊四拾錢
郵稅六錢
全四冊



定價參拾五錢
郵稅六錢



定價參拾五錢
郵稅六錢



定價 卅五錢
郵稅 四錢



定價 卅五錢
郵稅 六錢

(三)



定價四拾錢 郵稅六錢



定價四拾錢 郵稅六錢



定價壹冊四拾錢 郵稅六錢




定價 五拾錢
郵稅 六錢

源氏物語



定價 四拾錢
郵稅 六錢

(二)




定價 卅五錢
郵稅 六錢




定價 參拾錢
郵稅 六錢




定價 四拾錢
郵稅 六錢



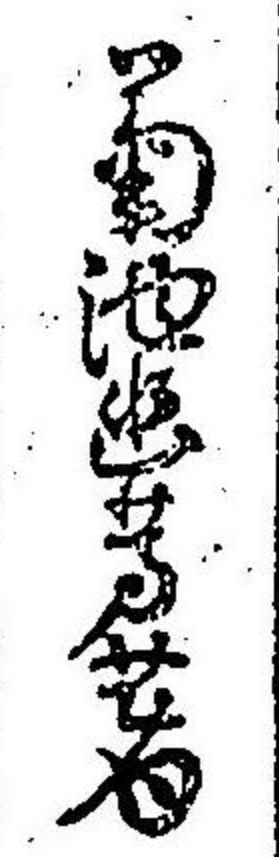

定價 壹冊 參拾五錢
郵稅 六錢



定價 壹冊 四拾錢
郵稅 六錢




定價 五拾錢
郵稅 六錢

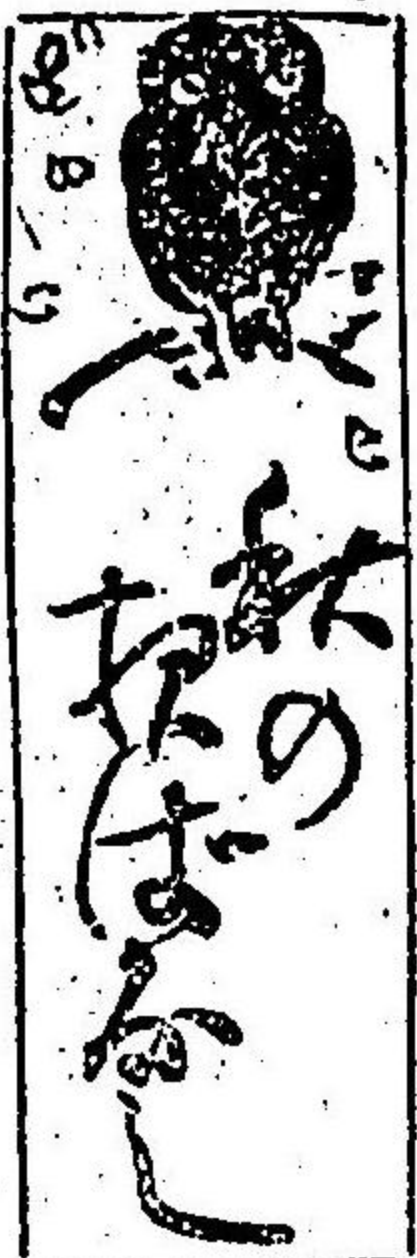
定價 壹冊 四拾錢
郵稅 六錢



定價 壹冊 四拾錢
郵稅 六錢

定價 參拾錢
郵稅 六錢



定價 參拾錢
郵稅 四錢



定價 參拾五錢
郵稅 六錢

定價壹冊四拾錢 郵稅六錢



全貳冊

定價壹冊四拾錢 郵稅六錢



全貳冊

白雲山園書



定價卅五錢 郵稅六錢



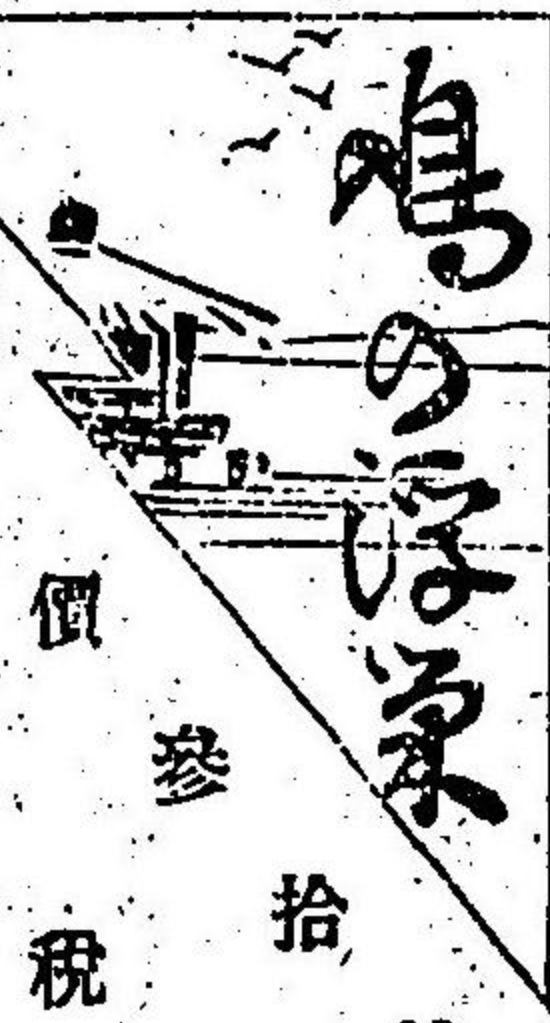
定價卅五錢 郵稅六錢



定價卅五錢 郵稅六錢

白雲山園書

定價郵稅



參拾六錢



定價參拾六錢 郵稅六錢



定價卅五錢 郵稅六錢

白雲山園書



定價四拾錢 郵稅六錢

白雲山園書



定價卅五錢 郵稅六錢



淑子屋

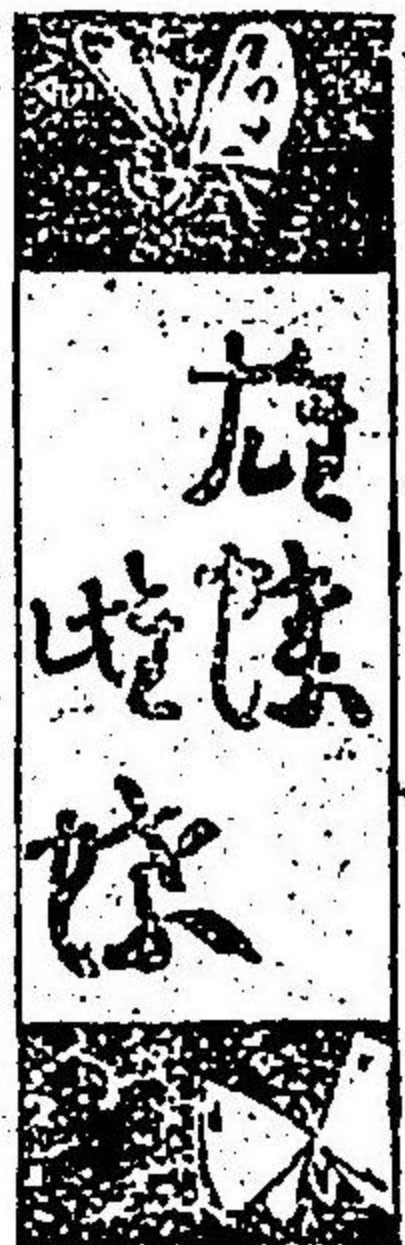
定價 卅五錢
郵稅 六錢



定價 四拾錢
郵稅 六錢



定價 卅五錢
郵稅 六錢



定價 卅五錢
郵稅 六錢



定價 參拾五錢
郵稅 六錢



定價 參拾五錢 郵稅 六錢



定價 四拾錢
郵稅 六錢

福心如也

定價 壹冊
參拾五錢
郵稅 六錢



定價 四拾錢
郵稅 六錢



定價 四拾錢
郵稅 六錢

相撲業平

定價 四拾錢
郵稅 六錢



定價壹册四拾錢 郵稅六錢

實業の光

定價 參拾五錢 郵稅 六錢

仇の

定價 參拾五錢 郵稅 六錢

全 貳 册

定價壹册四拾錢 郵稅六錢

白田

定價 四拾錢 郵稅 六錢

全 貳 册

定價 參拾錢 郵稅 六錢

利

定價 四拾錢 郵稅 六錢

辰五郎

定價 四拾錢 郵稅 六錢

定價 四拾錢 郵稅 六錢

定價 四拾錢 郵稅 六錢

現世相

定價 四拾錢 郵稅 六錢

全 貳 册

定價 四拾錢 郵稅 六錢

女書生

定價參拾五錢 郵稅六錢

大橋の物語



定價參拾五錢 郵稅六錢

花と月

花と月

定價參拾錢 郵稅六錢

中村の物語



定價參拾錢 郵稅六錢

花の物語

定價參拾五錢 郵稅六錢

花の物語

花の物語

花の物語

定價參拾錢 郵稅六錢



定價卅五錢 郵稅六錢

雪井の物語

定價參拾錢 郵稅六錢

雪井の物語



定價卅五錢 郵稅六錢



定價 卅五錢
郵稅 六錢

中山の風景

定價 卅五錢
郵稅 六錢

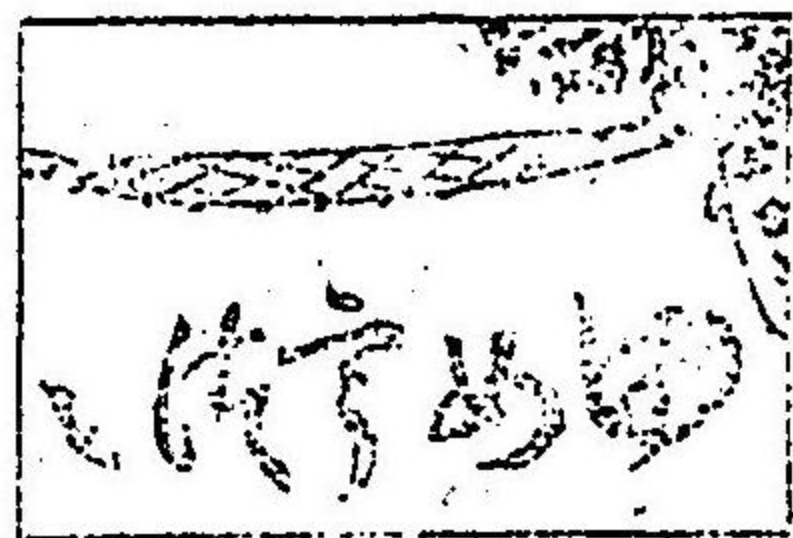


定價 卅五錢
郵稅 六錢



定價 參拾錢
郵稅 六錢

中山の風景



定價 參拾五錢
郵稅 六錢



定價 參拾五錢 郵稅 六錢

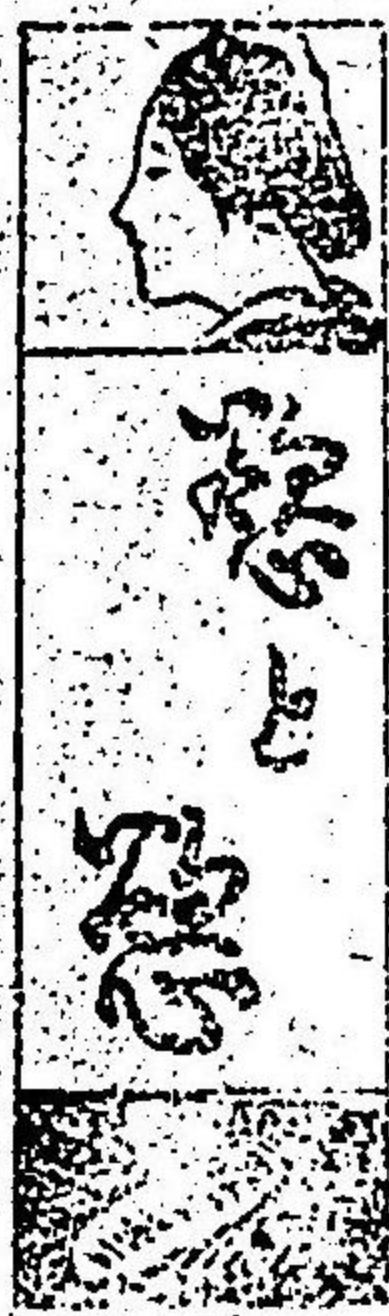


定價 參拾五錢 郵稅 六錢



定價 壹冊 參拾五錢 郵稅 六錢

全 貳 冊



定價 四拾錢
郵稅 六錢



定價 四拾錢
郵稅 六錢

中山の風景



定價 參拾錢
郵稅 六錢

河北陽南書局

定價四拾錢 郵稅六錢

定價四拾錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢





定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價壹冊參拾五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢





定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢


定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢





定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價壹冊參拾五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢





定價參拾五錢 郵稅六錢

女氏

定價參拾五錢 郵稅六錢

河之世鏡

定價參拾五錢 郵稅六錢

女氏

定價參拾五錢 郵稅六錢

旅行案内

每月發行

定價八錢 郵稅一錢

每月(一回)發行

(十九)

定價參拾錢 郵稅六錢

小園玉塚

定價參拾錢 郵稅六錢

腕乃洗

定價參拾錢 郵稅六錢

小園玉塚

定價參拾錢 郵稅六錢

定價卅五錢 郵稅六錢

根

定價卅五錢 郵稅六錢

小園玉塚

定價卅五錢 郵稅六錢

小園玉塚

定價卅五錢 郵稅六錢

(十八)



壹冊定價
參拾五錢
郵稅
八錢

あきしく子の編著にして、家庭良好の讀もの、その第壹篇より第三篇までは已に刊行せり、尙逐號發刊の計畫なれば續々御注文あらまはし。



毎月壹回發行
定價
廿五錢
郵稅
貳錢

小説はちぬの浦浪六氏が一代を風靡せし健筆を特に本誌の爲に揮はれたるもの、その當代の傑作たるはいふを待たず。社會雜觀には漢浦子が特に利犀の眼光を發揮せしものあり。其他本誌の特色たる百味譚叢。さては諸國物語。飛花落葉。千紅萬紫等。優に關西の文壇を代表するに足る。

張之